

歯学部ニュース

平成19年度第2号 (通算112号)



特集 卒業生を迎える口腔生命福祉学科
学生たちの活躍

新潟大学歯学部広報委員会

<http://www.dent.niigata-u.ac.jp/news.html>

目 次

特集1「卒業生を迎える口腔生命福祉学科」	1
鈴木 昭	
大内 章嗣	
特集2「学生たちの活躍」	10
(1)人命救助	
又吉 裕子・高橋 圭子・今井 秀明・石坂 淳子・池田 峻	
(2)デンタルでの活躍	12
テニス部 河村 篤志	
男子バレーボール部 小川 信	
柔道部 峯村 周	
卓球部 大墨 竜也	
歯学部卒業おめでとう	20
学部長から 前田 健康	
副病院長から 齊藤 力	
卒業生から 伊藤 恭輔・梅澤佳世子・鴻巣理紗子・濱松亜由美	
平成19年度 歯学部卒業生名簿	
大学院修了にあたって	27
靱立 桃子・梶田 桂子・庭野 将広	
平成19年度 大学院医歯学総合研究科博士課程修了者	
平成19年度 大学院医歯学総合研究科論文博士取得者	
臨床研修修了にあたって	34
橋本 亜樹・湯田亜希子	
看護部だより	36
山田 秀子	
素顔拝見	38
相田 美和・梶井 友佳・田口 裕哉・山本 幸司・両角 俊哉・渡邊 直子	
ポリクリを終えて	45
稻田 達哉・藤田 理雅	
早期臨床実習を終えて	49
中島 努・飯田 宏美・上加世田泰久・田中 陽子	
留学生紹介	53
Tetiana Haniastuti	
学会報告	56
同窓会だより	57
歯学祭を終えて	64
教職員異動	65
編集後記	69
編集後記表紙/裏表紙の説明	



保健医療と福祉の止揚が 高齢社会のパラダイムを変える

口腔生命福祉学科長 鈴木 昭

新潟大学歯学部口腔生命福祉学科は、高齢社会を見据えこれからますます必要とされる医療、保健、福祉を一体的にとらえ、全人的なアプローチのできる人材育成を教育理念に掲げ、全国に先駆け平成16年度に創設されました。オーラルヘルスプロモーションの展開により、健康へ寄与する指導的専門職業人（歯科衛生士・社会福祉士）の養成が、時代の要請であることは、その後続く例えば改正介護保険法にみられる予防福祉の潮流が証明しています。

その第1期生が今春卒業を迎えます。この間、学科創設時からご支援ご指導いただきました学内外の大勢の皆様にご改めてお礼申し上げます。

保健、医療、福祉を支える科学技術は日進月歩し、その制度は変革の只中にあります。このような社会にあっては、「起こってしまった問題」を解決するために活用する知識を集積した人より、「学ぶこと」を学び「これからやってくるであろう問題の発見とその課題を解決」するリファレンス力を身につけた人材が求められています。

このことに応えるために導入されたのが、当学科におけるカリキュラムの大きな特徴であるモジュール制と少人数討議・問題解決型学習法（PBL）です。PBL学習法は、これからいっそう進行すると考えられる人材の流動化する社会で組織と個人の間を柔軟にとらえ、しかもしっかりしたアイデンティティを有し個を主張しつつ「幅広い他職種とのチームワークによる関係性を構築できる力」の涵養にも有効であると考えられます。

一方、保健、医療、福祉もいわば実学であって、

幅広い人間理解を背景に高度の知識、技能、態度と実践力が求められます。

このことから口腔生命福祉学科では、総合大学としての利点を活かし他学部と連携協力するとともに授業計画の編成にあたっては、学外から多くの実務者を招聘し、保健医療福祉における今の動向を伝え、実務能力の修得に意を用いてきました。

病院臨床実習、社会福祉実習については学年進行とともに念入り緻密に編成し、周到に実施してきました。

4年次の病院実習はこれまでの各学年における実習の集積として、その実施にあたって医歯学総合病院の総力、教育、治療、研究機能をあげてご指導、ご協力いただきました。本邦では、初めてである4年制大学における歯科衛生士教育モデルの発信につながるのではないかと、考えています。

学生には実習中、心身の負担も感じるものがあつたかもしれませんが、それだけ濃密で充実した大学病院ならではの臨床実習であつたと思います。各診療科を周り、それぞれご指導いただいた先生方のミッション、パッションとその専門性、そして人柄に触れることができた実習は、これからの保健医療福祉人として必要な豊穡なイメージを育むことに大いに役立ったものと考えています。何よりも6ヶ月間にわたる実習をやり終えた達成感がこれからの自信につながるはずで、その財産を大切にしていきたいと思つています。

また、同じく4年次に実施した社会福祉援助技術現場実習については、学外にフィールドを求めざるを得ないわけですが、幸い県内はもとより、全国各地の社会福祉施設、病院、行政機関等のご

理解とご協力をいただき、円滑に実施することができました。施設の決定にあたっては種別を超えたジェネリックな福祉の実践文化を学生に体感してもらうために異なる2種類の施設を選択することとして、半分は学生の負担軽減を図るため学科で大学から近距離の施設を用意しました。残り半分は学生自らが、社会福祉士に求められる連絡折衝、交渉力を実地に訓練する意味合いも込めて自己開拓の方法をとりました。

福祉実習を終えた学生の振り返りでは、利用者と時空をともに過ごし体験過程を共有する体験を通じて、学び触発されたその感興を他者に伝えずにはいられない、という思いがひしひしと伝わってきました。

順序は逆になりますが、3年次に始まる福祉系科目の履修冒頭に社会福祉と実践現場について鳥瞰図的理解を深めてから以後の学習を進めることとして、亀田地区における施設、行政機関に依頼して実施する集中（4日間）見学体験実習を編成しました。この地区は福祉ゾーンとして社会福祉に関する相談、施設、医療、教育の機関が集積されていて、それぞれの機関が連携協働して、地域に開かれた運営を展開しています。年度始めの4月、5月の連休をはさみしかもほとんど調整の余地のない日程のなかで各施設が、福祉の実習では後発である当学科のプログラムを快く受け入れていただいていることに改めてお礼申し上げます。

次いで福祉系の授業（PBL）が始まるわけですが、当初、福祉の授業が分からないという声が多く寄せられました。これには次の2つの理由があることが、シナリオが進むにつれ分かってきました。一つは、論理の問題。急いで極論すれば、これまでの自然科学的因果律、帰納法による問題解決に向けた思考と討論のパターンに対して、社会人文学的なテーマでは、問題と結果（解決）について1対1の意味対応が少ないことによる説明と討論の困難性、思考方法の違いがあるのではないかと、ということ。二つ目はことば、シンタクスの問題です。口腔保健歯科学領域のシナリオで出てくる意味の分からない初出のことばは、調べる対象の用語として取り上げられ、学習課題に直結すると考えられますが、福祉のシナリオで例え

ば「措置」という用語が出てきても、日本語として辞書の意味は分かるから、「調べなければならないことば」としては、俎上にのぼってこない。ところが実は、「措置」は「措置から契約へ」という脈絡で用いられるように福祉固有の制度を指し示す「用語」であって調べなければうまく説明できず分からないことばであるわけです。しかも、福祉では（誤解を恐れずにいえば、判断に価値が介入してくるために導かれる援助の過程と結論が一様でないことから）、正しい解も一つではないから、事態がややこしいことになる。ということが、福祉の授業が分からないという背景にあるのではないかと、ということです。社会人文学系におけるPBL学習のファシリテート技法について、このような用語法も含めて固有の課題があるのか、今後検討していきたいテーマの一つです。因みに社会人文学系におけるPBLの導入は法学では先行例があるようですが、おそらく新潟大学がその嚆矢でしょう。

「食べる」、「話す」という口腔機能に関する専門的知識をもち、保健医療福祉を総合的に担っていくことは、とりもなおさず自然科学、社会人文学に通底することばを見つけ出す営みであると思います。

学生はシナリオ学習が進むにつれPBL授業が本来内包している翻訳可能性に気づき、これらの課題を克服してきましたが、このことはPBL学習に伴う相克を乗り越えてきたということにとどまらず、キャリア形成の視点からも、これまで呻吟してきた歯科衛生士、社会福祉士の仕事を一人ひとりの内面で統合し、止揚する、すなわち保健医療福祉を並列的にではなく、一体的にとらえそのことを自分のことばとして語るができるようになったことを意味していると考えています。

臨床実習や福祉の現場実習を触媒に到達した保健医療福祉の止揚の過程は、4年間の学業の集成である口腔保健福祉特論のテーマに集約されていて、この発表会の様子からも見てとれました。テーマは多岐に及び、これから口腔生命保健福祉が担う領域が広大であることを示唆しているとともに後に続く後輩が活躍していく分野を切り開いてい

こうという1期生の意気込みを感じた発表会でした。

社会福祉士についていえば、日本学術会議が提言しているソーシャルワーカーが登用される社会の実現に向けてその舞台装置が急速に整えられてきています。

これまで命の伸長は医療が、暮らしは福祉が担ってきました。これからは、少子、高齢社会にあって、文字通り命も暮らしも包摂したかけがえのない人生をまるごと応援していくことが求められています。

新卒業生の進路は、大学病院等の医療機関、福祉施設、進学、公務員等とこれも多岐にわたっています。1期生は学科の1期生であるだけでなく

全国にとっても1期生です。お口の中に人生の幸、不幸が表れるといわれます。保健医療と福祉を止揚したお口の健康の専門家が高齢社会のパラダイムを変えていく。そう信じて卒業を迎えることができることを卒業生のご家族、これまで支援していただきました皆様とともに喜びを分かち合いたいと思います。

ときあたかも最初の卒業を祝福するように、修士課程が新年度開設されます。全国で活躍する卒業生の後方支援基地としていつでも母校の資源を活用していただきたいと思います。

これまでご指導ご支援を賜りました学内外の皆様に、引き続き新卒業生ともども口腔生命福祉学科にご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。





口腔生命福祉学科 第一期生の卒業を迎えて

～口腔生命福祉学科4年間の歩みと 大学院(修士課程)の設置～

医歯学系・教授
(口腔生命福祉学科 福祉学講座) 大内章嗣

まずは、口腔生命福祉学科第一期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。4年前(3年次編入生の皆さんは2年前)、なんら実績のない新設学科に入学してくる皆さんは期待半分、不安半分といったところだったでしょう。実は皆さんを迎え入れる我々教員の側も実は皆さん以上に期待と不安で一杯でした。歯科衛生士と社会福祉士のダブルライセンス取得を目指すという、これまで例のないコンセプトの学科で、そのコンセプトの実体化に向けてとにかく走り続けてきた4年間であったというのが今現在の私の偽らざる心境です。

しかし、平成16年4月の学科設置後に行われた介護保険法改正や医療制度改革などの様々な制度改正や環境変化が、学科の目指す方向が正しかったことを証明しつつあります。第一期生の皆さんには、こうした先駆的な志を持った新潟大学歯学部仲間としての誇りと自信を持って、「食べること(口腔機能)を通じて人々や地域社会の幸福を総合的に追求できる専門職の先駆者」として実社会で活躍していったと切に希望します。

口腔生命福祉学科のねらいや教育カリキュラムの特徴などについては、すでに歯学部ニュースをはじめ、色々な所で述べられていますので、ここでは、第一期生の卒業を迎えるにあたり、口腔生命福祉学科4年間の歩みを振り返るとともに、平成20年4月設置が認められた新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔生命福祉学専攻(修士課程)について紹介させて頂きたいと思います。

1. 学科開設1年目(平成16年度)

口腔生命福祉学科は大島勇人初代学科長のもと、第一期生となる学生20人(男性2人、女性18人)、4人(教授3、助教授1)の専任教員と6人の

予定教員という体制でスタートしました(表1)。

歯科衛生士を養成する4年制大学課程としては東京医科歯科大学口腔保健学科と並んで全国初の開設となりましたが、東京医科歯科大学は社会福祉士国家試験受験資格については選択制のカリキュラムを採用しています。その後、広島大学歯学部など、歯科衛生士を養成する4年制大学課程が毎年のように設置され、現在は5校を数えています。全ての学生に必修として歯科衛生士と社会福祉士国家試験受験資格取得のためのカリキュラムを提供しているのは口腔生命福祉学科だけです(表2)。

学科設置に向けた概算要求、設置・指定申請などの動きについては、歯学部ニュース平成16年度第1号の特集で大島勇人学科長がご紹介されていますが、学科開設前年の平成15年8月には、予定教員を中心とした口腔生命福祉学科カリキュラム準備委員会が組織され、開設に向けた具体的な作業が開始されています。ここでは、全学共通科目(現在の「教養教育に関する授業科目」)の調整を含めた具体的なカリキュラムの検討はもとより、入学者選抜方法の検討、学生募集に向けたPR活動など、開設に向けた様々な準備が進められました。このカリキュラム準備委員会は、その後、口腔生命福祉学科専任教員打合せと名称を変え、学科の運営全般について専任教員間で協議する場として現在(平成20年1月末)までに通算98回を数えています(この他にも、その時々が必要に応じてカリキュラム検討WG、施設・設備整備WG、大学院設置WG等が設置・開催されていますが、これらの数は含みません)。

初年度は五十嵐地区で外国語や、人文・社会・自然科学などの教養科目を受講しますが、実は心

表1 口腔生命福祉学科専任教員の配置状況

		平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度
学 科 長		大島 勇人教授	富沢美恵子教授	←	鈴木 昭教授
支援学講座 口腔衛生	山 崎 和 久	教 授	←	←	←
	小 野 和 宏	(准教授)	教 授	←	←
	八 木 稔	(准教授)	←	准教授	←
	石 川 裕 子		助 教	←	←
支援学講座 口腔介護	富 沢 美恵子	教 授	←	←	←
	福 島 正 義	教 授	←	←	←
	ステガロク・ロクサーナ	(准教授)	←	准教授	←
	柴 田 佐都子				助 教
福祉学講座	大 内 章 嗣	(准教授)	教 授	←	←
	五十嵐 敦 子	(准教授)	←	准教授	←
	黒 川 孝 一			准教授	←
	中 島 俊 一	(助 教)	←	←	助 教
学 講 座 福祉援助	鈴 木 昭		准教授	教 授	←
	隅 田 好 美	准教授	←	←	←
	高 橋 英 樹			准教授(10/1)	←

注：職名は改正学校教育法に基づく現行職名で記載。()内は予定教員。

表2 歯科衛生士を養成する4年制大学課程

<p>【平成16年度設置】</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 新潟大学歯学部口腔生命福祉学科 (DH&SW) ■ 東京医科歯科大学歯学部口腔保健学科 (DH +SW) <p>【平成17年度設置】</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 広島大学歯学部口腔保健学科口腔保健衛生学専攻 (DH +SN) <p>【平成18年度設置】</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 埼玉県立大学健康開発学科口腔保健科学専攻 (DH +SN) <p>【平成19年度設置】</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 徳島大学歯学部口腔保健学科 (DH +SW) <p>注：()内の「DH」は歯科衛生士、「SW」は社会福祉士、「SN」は養護教諭資格を示す。また、「&」は両資格必修、「+」は選択により取得可能となる。</p>
--

理学などの社会福祉士国家試験に必須の科目も履修しています。また、第1学期には歯学科学生と共通で歯学部スタディスキルズ、早期臨床実習が旭町地区でスタートしています。

また、5月13日には多数の関係者のご参加を頂き、口腔生命福祉学科設置記念講演会・記念式典が開催されました。

9月には歯科衛生士養成の高度化を図ることを目的に、修業年限を2年以上から3年以上に変更

するなどの「歯科衛生士学校養成所指定規則」の改正が行われました。学科設置の構想段階から将来的には歯科衛生士は3年制へ移行するとの前提で検討を進めていましたので、概ねこの変更は織り込んでいましたが、新指定規則への完全対応を図るため、教育課程(学部規定)の変更承認申請を同年中に行っています。こうした作業と平行して、歯学部カリキュラム委員会等で歯学科教員への説明・協力要請を行いながら、次年度からの専

門授業科目の開講に向けた準備が精力的に進められました。

また、前年度からの学生募集のための高校回りに加えて、平成16年度からは将来の卒業生の就職先の確保に向けて、県庁、市役所、社会福祉施設、病院等を教員が訪問する就職支援活動を開始しています。

平成16年10月23日には新潟県中越地方をマグニチュード6.8の大地震が襲いました。この時、歯学部、医歯学総合病院等が実施する歯科医療救護活動において、避難所等における巡回口腔保健相談・指導のニーズが高かったことから、口腔生命福祉学科教員も積極的に参加・協力しました。この時は、1年生しかいなかったため、実現できませんでしたが、平成19年7月16日に発生した新潟県中越沖地震の際には、ある程度状況が落ち着いたところで関係者にご了解を頂き、希望学生を引率して、巡回口腔保健相談・指導のお手伝いをさせてもらうことが出来ました(写真1)。歯科衛生士としても、社会福祉士としても得るものの多い、非常に貴重な体験になったのではないかと思います。

2. 学科開設2年目(平成17年度)

第二期生となる学生20人(男性2人、女性18人)を迎え、学科長が大島勇人教授から、富沢美恵子教授に交代するとともに、新たに4人(教授2、助教授1、助手1)が専任教員として正式任用され、予定教員と合わせて12人の体制となって2年目がスタートしました。

実は2年次からの専門科目の本格実施にあた



写真1 口腔生命福祉学科学生による避難所での歯みがき指導

り、教室等の確保が必要となりますが、歯学部としてまとまった空きスペースが確保できるのが、歯科の病棟が新病棟へ移転する平成18年1月以降となるため、平成17年度は2年生用の教室として旧歯科技工士学校の教室を転用することになりました。新設学科として期待してきた一期生には、少々肩透かしだったかもしれませんが、前年度末に旧技工実習室を専用のPBL(Problem-Based Learning)室3室に改修整備し、ここが常時、自主学習スペースとして占有できましたので悪いことばかりではなかったと思います(写真2)。

なお、口腔生命福祉学科のカリキュラムの特徴の一つである、PBLの実施にあたっては、膨大な数のファシリテーターが必要となりますが、学部長および歯学部教授会のご英断により、口腔生命科学系列すべての教員と大学院生(TA)の協力のもと実施することになったのは大きなブレイクスルーだったと思います。

もう一つの口腔生命福祉学科カリキュラムの特徴として、様々な学外施設での現場体験実習の充実がありますが、初年度である平成17年度から保健所、病院歯科、特別養護老人ホーム、児童相談所など、多くの施設の協力を得ることができました。これも地域のなかで新潟大学歯学部がきちんとした実績を積み上げてきたからこそだと思えます。

また、2年次の専門科目は歯科衛生士関係の科目が中心であり、特に第2学期からは予防処置等の相互実習を行わなければならないため、基礎(相互)実習室兼、将来の歯科衛生士臨床実習室を整



写真2 旧歯科技工士学校跡地に整備されたPBL室で

備することが、学科設置当初からの懸案事項でした。しかし、なかなか概算要求では認められず、大変苦労しました。最終的に学長裁量経費等、様々な経費から工面して頂き、現在のお口の健康室として、第2学期開始直前の9月末に改修・ユニット等の据付工事が完了するという綱渡りでした(写真3)。

その他、正課外の活動となりますが、新潟大学キャリアセンターとの連携のもと、夏休み期間中に官庁、医療・福祉施設、企業などで職場体験を行うキャリアインターンシップや、医学部が中心となって実施している地域医療フィールドワーク・ワークショップ(通称:赤ひげFW・WS)への参加支援、福祉ボランティア等の紹介など、2年次のうちから多様な社会現場を体験し、自らのキャリア形成を促す活動にも力を入れてきました。

3. 学科開設3年目(平成18年度)

第三期生20人(男性2人、女性18人)に加え、この年から3年次編入生10人(女性のみ)を迎えました。

教員も1人が助教授から教授に昇任するとともに、新たに5人が専任の助教授として正式任用(うち1人は新潟県庁から10月1日採用)され、予定教員と合わせて14人体制となりました。

新たに開講された3年次のカリキュラムには、それまでの歯科衛生士としての科目に加えて、社会福祉原論、社会福祉援助技術論などの社会福祉系の科目が多く含まれています。福祉系の科目でも、PBLを基本としながら、障害者施設や老人福



写真3 医歯学総合病院内に整備されたお口の健康室での相互実習

祉施設などでの早期体験実習や第一線で活躍されている現場担当者を非常勤講師として招くなど、現場感覚を重視した効果的なカリキュラムとなるよう工夫しています。

加えて、正課外の活動になりますが、行政希望の学生や摂食嚥下に興味を持つ学生など、希望学生を主体としたサークル学習会の活動を支援し、将来の就業に向けたサポートも行っています。

また、この年から、五十嵐地区での全学向け教養教育に関する科目(Gコード科目)として、学科教員を中心とした「健康福祉学入門」と「新潟発福祉学」を開講し、多くの学生から受講を得ています。

平成18年度には、口腔生命福祉学科の今後に大きく影響する制度改正も行われました。介護保険法が改正され、介護予防のためのサービスとして「口腔機能の向上」が位置づけられると共に、こうした介護予防サービスを包括的にマネジメントする機関として地域包括支援センターが創設され、ここで従事する職種として、主任ケアマネジャー、保健師等とならんで、社会福祉士が位置づけられたことです。それまで学科の趣旨・目的などを福祉・介護関係者に説明しても、「口腔ケアは大事ですよ。」程度の反応で、今ひとつ具体的には理解されていなかったのが、これを境に大きく変化しました。その後も、自立支援法の全面施行、医療制度改革など、学科への追い風が次々と吹いています。内心、「時代を10年ぐらい先取りしているかな。」と思っていたものが、あっという間に追いつかれてしまい、最近では「本当に社会ニーズに応えられるだけの人材を養成できているだろうか?」と身を引き締めないといけない状況になっています。

4. 学科開設4年目(平成19年度)

第四期生20人と3年次編入生10人(いずれも女性のみ)が入学するとともに、いよいよ第1期生が最終学年を迎えました。

教員も助教2人が正式任用となり、教授6人、准教授6人、助教3人の総勢15人が晴れて学科教員として位置づけられることになりました(写真4)。このうち、歯科衛生士である助教2人の教員

は、平成16年の指定規則改正で「歯科衛生士専任教員3人以上」という要件が新たに規定されたことに伴う増員でした。大学全体の教員定員が削減されるなかでこうした体制を確保できたのも、口腔生命福祉学科の意義を認めて頂き、歯学部を挙げて応援頂いた賜だと思えます。15人の教員の所持資格等は歯科医師8人、歯科衛生士3人、社会福祉士2人、薬剤師1人、行政経験者4名（重複あり）などで、ユニークな学科に相応しい多彩な顔ぶれとなっています。

4年次のカリキュラムでは、歯科衛生士としての臨床教育の集大成として、医歯学総合病院の外来診療室や病棟等における歯科衛生士臨床実習と、学外の福祉・医療施設での社会福祉現場実習が中心となります。歯科衛生士臨床実習では、病院内での実習に加え、新潟市歯科医師会にご協力頂き、訪問歯科診療への同行実習も行っています。社会福祉現場実習では、学科で指定した実習施設と学生が自己開拓した施設、それぞれ2週間、計4週間の実習を行っています。いずれも、受け入れて頂く診療室や施設などのご理解・ご協力があって成立するものであり、初年度は様々な試行錯誤がありましたが、より効果的な実習となるよう努力していきたいと思っています。

さて、4年次には、カリキュラム以外に大きな課題が2つ存在します。「国家試験」と「就職（進路）」です。いずれも主担当教員を決めたうえで、すべての専任教員が相談や補講の実施などできる

限りの支援をしてきたつもりですが、本稿執筆時点ではいずれも最終的な結果は出ていません。社会福祉士国家試験は1月27日、歯科衛生士試験は3月2日の実施で、合格発表はいずれも3月末です。就職については、一般企業の採用活動がどんどん早期化する中で、歯科衛生士・社会福祉士などの免許資格専門職は一般に動きが遅いようで、他学部の内定状況と比較するとやはり低めの数値となっています。ただし、本年度は多くの求人を受け、今後選考採用が行われる者も一部含まれていますが、現時点で8割方の学生がなんらかのメドがついています。その内訳としては進学（歯学科3年次編入、後で紹介する口腔生命福祉学専攻を含む大学院等）と病院歯科が各3割、残りは歯科診療所、行政、歯科衛生士学校などとなっています。福祉系を目指す学生も若干いたのですが、これら学生のほとんどは大学院等に進学して更に勉強する道を希望しており、現時点で福祉関係へ就職するのは新潟県職員（福祉行政職）に合格した1人だけとなっています。

実は、先に述べた介護保険制度改正や現在検討が進められている退院時支援・地域医療連携体制の見直しの影響があるのか、社会福祉現場実習でお世話になった複数の病院から、受け入れて頂いた学生を名指しで「（口腔ケアの指導もできる）MSWとして来てくれないか？」というお話しを頂き、個人的には是非とも就職して欲しかったのですが、残念ながら学生の希望と合いませんでした。



写真4 口腔生命福祉学科専任教員（平成19年度入学式にて）

た。要介護者も、障害者もその多くは入院治療を経ているわけですから、歯科を持たない病院にも、歯科衛生士としての知識・技術を持った職員を送り込んでいくことが、学科の理念を広めていくのに一番効果的なのではないかと思っています。

5. 大学院（修士課程）の設置

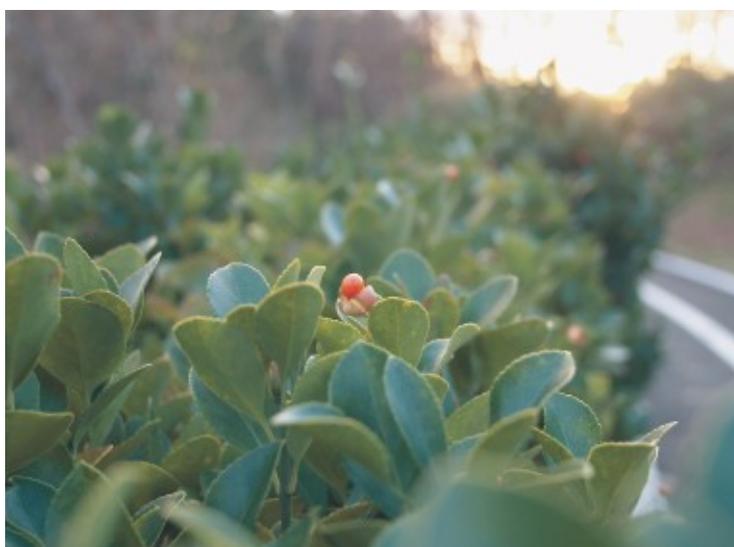
歯科衛生士養成課程の修業年限延長や、社会福祉士および介護福祉士資格・養成制度の見直しが行われるなど、近年、保健医療福祉サービス従事者の質の確保が課題となってきています。加えて、介護・障害者福祉・医療関係者の側からの摂食嚥下リハビリや口腔ケアに対する関心や期待も急速に高まっています。こうした背景に鑑み、口腔を中心とした生命医療科学を基盤として、①高度な知識・技術を有し、総合的な口腔保健医療・福祉サービスの分野で指導的役割を果たせる実践的・高度専門職業人、②口腔生命科学と実践的な社会福祉学領域との統合的・学際的研究および教育を推進できる人材の育成を目的とした大学院修士課程の設置に向けて検討を進めてきました。平成19年12月3日に文部科学省より、新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔生命福祉学専攻(修士名称は「口腔保健福祉学」)として開設が認可されました。現

在、4月の開設に向けて、学生の募集・選考作業と平行して、カリキュラムの整備などを急ピッチで進めています。

本専攻は更に高度な知識・技術を身につけてステップアップを目指す口腔生命福祉学科卒業生の受け皿となることはもちろんですが、社会人枠も設定して、広く保健医療福祉の現場で働いている方にも門戸を開放しています。こうした方に入学して頂き、摂食嚥下リハや口腔機能維持・管理に関するリカレント教育の場を提供するとともに、多職種協働による学際的研究を広げていきたいと考えています。

おわりに

最後になりましたが、口腔生命福祉学科の教育には歯学部・医歯学総合病院の教職員の皆様をはじめとして、同窓会・父兄会や関係施設・機関の皆様にも多大なご協力を頂いております。なんとか無事に一期生の卒業を迎えられましたことはひとえに皆様のお陰であるとの場を借りて心よりお礼申し上げます。今後とも引き続き、学科および大学院口腔生命福祉学専攻（修士課程）の教育研究につきまして、ご指導ご協力を賜りますようお願い致します。



昨年6月、歯科外来西口近くの路上に倒れていた医科通院中の心肺停止の患者様を本学歯学科の学生5人が発見し、現場近くに居合わせた本院の看護師に知らせるとともに看護師の指示に従い緊急連絡及び歯学部を設置してあるAED（自動体外式除細動器）を使用し救命処置を行い、患者様を救命することができました。彼らはその活躍をたたえられ、7月11日に新潟大学歯学部より表彰されました。今回、彼らからこの突然の出来事に遭遇した率直な感想をインタビュー形式で寄稿していただきました。実際に患者様の生死に関わる状況に直面し、動揺しながらも看護師と協力して救命しようとした熱意が伝わってきます。また、歯学部で一般医学や口腔外科学、歯科麻酔学を学んできた彼らでしたが、救命救急に対する自分たちの知識やトレーニングが不足していることも痛感したようです。



はじめてのAED～救命救急に携わって～

歯学科6年 又吉裕子・高橋圭子

歯学科5年 今井秀明・石坂淳子・池田 峻

今回、あの現場を皆さんにより身近に感じていただくこと、このようなインタビュー形式で表現させていただきました。自分たちが感じたことがうまく伝われば幸いです。

（池：池田、石：石坂、今：今井）

—事件に気づいた時はどんな状況でしたか？

池：あの時は本当びっくりしました。外に人が倒れていて。

今：「心停止っ!!」って聞こえた瞬間、あたふたしました。あの時そういえば池田君がAEDっていったんです。

池：麻酔の講義で勉強したのを思い出したんです。

—よくAEDのある場所がわかりましたね。

今：病院内のわかりやすいところに設置されているので知っていたんです。そういえば池田君、AEDの使い方知ってたの？

池：よくはわからなかったけど、テレビで一般の人にも使えるようなこと聞いていて持ってき

たんです。

—AEDって知っていましたか？

石：たしか、愛・地球博でこの装置が活躍したって聞きました。

今：でも、使い方はそんなに難しくはありませんでした。機械が全部指示してくれたから。

池：一般の人でも簡単に使えるということがよく分かりました。あとは冷静でいられるかだと思います。

—どうやってみんなで連携を取ったのですか？

今：はじめてこういう状況に遭遇すると、何をしたらいいか判断できませんね。

石：そういう点では、看護師さんがいてくれて本当に助かりました。まわりにいた人たちに的確な指示をしてくれました。意識の確認、声かけ、気道確保に人工呼吸……。

今：迅速な対応が大事なんだそうです。

池：救命救急って一刻一秒を争うって講義で勉強しました。

今：そういう意味で、自分たちは力になれたのか

なと思います。

—今回の件で感想や反省がありますか？

石：今回のことで自分たちでもできることがあるものだと思います。

今：患者さんを助けたい一心で、不安だったけど、必死になっていました。でも一人ではきっと何もできなかつたろうと思います。

池：自然とチームができて、看護師さんを長にして連携がとれていました。

石：自分が出る役割を、それぞれが実行していた気がします。

今：でも、もっとスムーズにできたらよかったのにと反省しています。

石：日頃からこういうことが起こるかもしれないと思って訓練しておくことも必要だと感じました。

今：あの後に救急救命の実習をやったけど、もっと早い時期に実習をやっていたら良かったと思います。

池：あの実習を受けなければいざという時、率先して動けると思います。

石：歯科治療中に何か起きた時にも、すぐに行動できることが大事だと思います。今後も勉強していきたいと思います。

—ありがとうございました。



この出来事の後、歯科外来における救急体制に対して改善が行われ、歯科の患者様や学生、教職員の急変時には口腔外科、歯科麻酔科の歯科医がすぐに各部署より駆けつけられる歯学部全館放送のシステムの整備がなされました。以前よりあった心肺停止のような一刻を争うようなときに、医科の外来・病棟から医師が駆けつける医科全館放送のシステムも、歯科も含めた全館放送ができるように改善されました。また、AEDを使用した救命救急の講習も教員、看護師だけでなく歯科研修医、歯学部学生にも行われるようになっていきます。今回の学生の活躍により、歯学部における救命医療の重要性に目が向けられるようになりました。今回の学生の活躍をたたえるだけでなく、本学の学生や卒業生、教職員が患者様や一般市民の救命医療の一助を担えるように、研鑽を怠らないことが必要と感じられました。

(前書き、後書き文責：編集委員 福田純一)



テニス部の活躍

歯学科3年 河村 篤志

今回歯学部ニュースの方で部活動を取り上げて頂けるということで、この場をお借りしてテニス部の紹介をしたいと思います。本来ならば、テニス部の紹介は自分よりも経験豊かな先輩の方が適任だとは思いますが、現在主将を務めさせて頂いているので、先輩方に代わって書きたいと思います。

突然ですが、みなさんは「歯学部テニス部」と聞くとどのようなイメージをお持ちでしょうか？

自分がテニス部に入ってから早3年が経ちますが、同級生などからはテニス部について、「練習って週7回やってるんでしょ？」や「すごく厳しくて休む暇もないんでしょ？」などネガティブなイメージしか聞かれたことがありません。けれども、これらの質問のほとんどが（中には的を射ているものもありますが）間違ったイメージと言ってよいでしょう。現在テニス部は毎週水曜日と土曜日に週2回のペースでやっており、内容もハードなものはほとんどなく、男女合同でテニスを楽しみながら練習を行っています。けれども、もちろん「ただ楽しめればいい」という考えではなく、全員が向上心を持ち、強くなるよう励んでいる“熱い”部活であることも自負しています。このような向上心とやる気があるからこそ、暇さえあればテニスをしてしまう部員が生まれ、そのため時には上のような勘違いが生まれてしまうのだと思います。この様なテニスに対するよい雰囲気は代々先輩方から受け継がれてきたもので、この雰囲気を守り、また後輩に受け継いでいきたいと思っています。

さて、テニス部だけではなく他の部活にとっても、1年の中の最大のイベントといえばデンタルだと思います。このデンタルに向けて様々な部活が汗を流していると思いますが、テニス部のデン

タルは新学期を迎えた春から始まります。というのも、デンタルに向けてのランク戦が春から行われるからです。テニス部のデンタルには、男子はダブルス2組シングルス3人の計7人、女子はダブルス1組シングルス2人の計5人が出ることが出来ますが、基本的にはレギュラーは固定性で、数少ない椅子を争わなければなりません。勝ち進み、晴れてレギュラーになれる人もいますが、その一方で負けて涙を呑む人もいます。かくいう自分も悔しい思いをした一人です。そしてレギュラーが決まると、後はデンタルに向けての練習の日々が始まります。この時期には学業に支障が出ないようにしながら週5回で練習が（もちろん自主的に）行われます。今回のデンタルで、女子3連覇を達成しましたが、指導者がいるわけでもなく、部員も経験者の方が少ないというわがテニス部がこのような素晴らしい成績を収めることができたのはよい雰囲気と練習量の結果だと思っています。

デンタルが終わり、それまで第一線で部活を引っ張って頂いた先輩方が引退してしまい、現在の部活は少し寂しくなっていました。先輩方には忙しい合間を縫って練習に参加して頂いていますが、今は主に1~4年生の17人で部活を行っています。人数も以前に比べ少人数になってしまい、戦力的にも大きく下がってしまいましたが、天井がないほうが空も見やすくなります。試合に出られる機会が多くなり、より経験を積むこともできます。いずれ先輩方がいた頃よりもよいチームを作りたいと密かに思っています。けれども、まずは自分が先輩よりも強くならなければ話が進まないの、野望が叶うのはだいぶ先のことだとは思いますが、部長としての日々は思っていたよりも大変です。練習場所の確保からメニューの作

成、他校との連絡などまだまだ以前の部長には遠く及ばず、落ち込んでしまうことも多々あります。まだまだ頼りなく「黙ってついて来い」とは言えませんが、折角部を任せて頂けたのでこのプレッシャーもむしろ楽しみながら精一杯やっていきたいと思っています。

最後になりましたが、いつも陰ながら自分たち

テニス部を支えて頂いている大学の方々、OB・OGの先生方、また先輩方にこの場を借りて感謝を述べたいと思います。そのような応援の聲に恥じぬよう、新潟大学の誇りを胸に少しでもよい結果を求め、最強の挑戦者として白球ではなくテニスボールを全力で追いかけていきたいと思いません。



平成19年8月4日 デンタル開催地軽井沢にて閉会式後



平成19年8月3日 デンタル女子4回戦 対愛知学院大学戦
ダブルス1で奮闘する山田めぐみ（左）と高橋圭子（右）

男子バレーボール部の活躍

歯学科5年 小川 信

大学に入学して、僕がまず最初にやりたかったのがもう一つの大学生活でもあるサークル活動でした。高校の時にバレーボールを部活としてやっていた僕は、色々なバレーのサークルを見学しました。もちろんバレー以外のサークルも見学しましたが、結局僕はすぐに「新潟大学歯学部バレーボール部」に入部しました。

よくあるサークルのように、“特に厳しい練習もなく、参加も自由で、男女一緒に楽しく試合をやる”みたいな自由な感じもいかにも大学生らしくて楽しそうに思いました。しかし、僕が心の底から欲していたのはそういうものではありませんでした。

仲間が必死になってつなげてくれたボールを相手コートに叩きつけて得点にしたとき、自分がなんとかつなげたボールを仲間が得点にしてくれたとき、その時の感動はなによりも素晴らしいものなのです。それが、緊張感あふれる大きな大会、その大事なゲームの大事な場面ならばなおさらです。さらにバレーボールは点が入る度にみんなで集まって派手にガッツポーズや、ハイタッチをします。そんな瞬間があるから、仲間が、チームが大好きになるのです。そんな瞬間がこの部活にはありました。

しかし、いつも楽しいことばかりではありません。この部活は新潟大学歯学部の部活のなかで、おそらく最も厳しい練習をしていると思います。また人数も少ないため、一人一人がやらなければいけない仕事が多くて大変です。当然のことですが、僕らは勉学が本業であるし、またほぼ全員がアルバイトをしているので、とても忙しい日々を送っています。同じクラスの仲間がテストが近いために部活を休んでいても、僕らは休むことができません。一人が休むことはチームのみんなに大きな迷惑をかけることになるからです。休日にやりたいことがあっても、練習試合や大会などがあるからあきらめなければいけないことも多いで

す。厳しい練習のために体がだるくて、朝学校に行くのがとても辛いこともしばしばです。「大学生なのになんでこんな自由のない、ギリギリの生活をしているんだろう」と退部を本気で考えたことは何度もあります。

近年、新潟大学歯学部の男子の団体競技は全くといっていいほど結果を残せていません。なぜなら各学年に男子が20人ほどしかいないからです。他の国立大学は2倍ほど、私立の大学などはその3～4倍の人数がいて、さらに私立の大学などはどの競技においても国体選手、高校の県選抜選手などがあるので、当たり前の結果だと思います。そんな厳しい状況下において我が男子バレー部は一昨年デンタル（全日本歯科学学生体育大会）で準優勝、去年3位でした。これは本当に素晴らしい快挙だと自分でも思います（笑）。

今年（2007年）、男子バレー部は新入生が入らず、6人ちょうどになってしまいました。近年リベロというポジションが追加され、どのチームも7人で試合をするので、6人で試合をするのは非常に不利となります。その6人にマネージャー、コーチ（他大学の友人）、助っ人1年生を含めた9人という出場校のなかで最も少ないメンバーで今年のデンタルに臨みました。

今年のデンタルは正直、新潟大学の強さは圧倒的でした。新潟大学は優勝候補の一つとしてマークされていて、色々な大学が僕達の試合の観戦やビデオ撮影を行い、研究をしていましたが、「そんなの関係ねえ」という感じで、大差をつけて勝ち進んでいきました。

予選の最後に今年から国体選手のエースを加入した優勝候補の東京歯科大学と対戦しました。事実上の決勝戦という感じで、予選であるにもかかわらず大勢のギャラリーと何台ものビデオカメラに囲まれて、その試合は行われました。

予想通り接戦となり、かなり白熱した試合になりました。途中相手が優勢な状態になりましたが、

僕達は全く負けることを考えませんでした。それはおそらく今までたくさんの練習試合、大会を経験してきたことからの自信によるものだったのでしょう。結局その試合はギリギリのところまで逆転勝ちをおさめ、新潟大学は全勝で決勝トーナメントにコマをすすめました。

決勝トーナメントは準々決勝、準決勝と順調に勝ち進みましたが、決勝では予選で対戦した東京歯科大学にあたり、今度はあっさり負けてしまいました。結局今年のデンタルは準優勝ということで、残念ながらまたしても優勝には手が届きませんでした。

試合が終わったあと、他の大学の選手達が、「普段どういう練習をしてるんですか?」「自分達もこれから新潟大学のようなチームをつくりたいです。」と言ってくれました。うちのチームにはスタースタプレイヤーはいません。平均身長も低く、大学からバレーをはじめたメンバーもいました。また、他のチームのように自分達を常に指導してくれる現場監督が存在するわけでもありません。

みんなで一つ一つのプレーについて、その練習

について常に考えること。ビデオや実際の試合を何度も見ながら、他のチームの研究、対策をみんなでも真剣に考えること。そしてなによりも多くの練習を積むこと。それが僕達のやってきたことでした。

今現在、男子バレー部は4人しかいません。来年デンタルに出場できるかどうかもう危うい状態ですが、有力な新人が入ってきて、来年のデンタルこそ悲願の優勝を遂げると信じています。

最後に、僕達を支えてくださった麻醉科の染谷先生、塚田先生、口腔外科の飯田先生、五島先生、池田先生、庭野先生、安島先生、歯周科の島田先生、前川先生、小児歯科の渡辺先生、佐野先生、予防歯科の近藤先生、金子先生、矯正科の小栗先生、丹原先生、義歯科の木下先生、その他各方面で活躍していらっしゃるOB、OGの先生方に心から感謝して、筆を置きたいと思います。先生方のおかげで僕達はとても楽しく、素晴らしい時を過ごすことができました。本当にありがとうございました。



平成19年8月 デンタル表彰式後 長野県大町市にて

求 柔道部員!!

歯学科5年 峯村 周

第39回全国歯科学生体育大会柔道部門・個人戦男子73kg以下級において優勝致しましたことをご報告させていただきます。

歯学部柔道部は今年春に私が結成し、医学部柔道部と合同で練習してきました。この場をお借りして、医学部柔道部顧問の出羽准教授（法医学）と医学部柔道部の仲間達、そして快く歯学部柔道部の顧問になって下さった八巻先生（兼ラグビー部顧問）と私の我儘を聞いてくれた歯学部ラグビー部の仲間達に心より御礼申し上げます。

今回は柔道の話がメインになりますが、私は歯学部ラグビー部の主将でもあります。伝統ある歯学部ラグビー部を差し置いて、今年出来たばかりの柔道部の件で私がこのような文章を書くことは非常に心苦しいことです。先日（現在執筆日時12月26日）行われた第40回全国歯科学生体育大会ラグビー・フットボール部門では、1回戦に九州大学と対戦し19対10で敗北してしまいました。今後はラグビー部の活動でも皆様にご報告できるよう頑張りたいと思います。

さて、デンタルでの試合の様態を報告することより、皆様に柔道のことをもっと知って頂きたいと思い、今回は柔道に関する宣伝をさせて頂きたいと思います。

私は長野県の出身です。長野市松代町というところで3歳から高校卒業までを過ごしました。松代町は真田家十万石の城下町です。初代松代藩主は、大阪夏の陣で討死した真田幸村（歴史好きにはファンも多いことでしょう）の兄、真田信之です。最近人気のNHKの大河ドラマ「風林火山」の舞台となった川中島の合戦は、町の北を流れる千曲川の対岸で行われました。私の卒業した清野小学校の裏にある妻女山は、上杉謙信が合戦時に陣を張った場所で、更に私の卒業した松代中学の隣には、武田信玄の出城であった海津城跡が在ります。松代町出身の有名人は他にも、幕末の大思想家「佐久間象山」や、最近話題になった映画「硫

黄島からの手紙」で有名になった硫黄島の総指揮官「栗林忠道」中将がおられます。それから太平洋戦争末期に、東京大空襲で東京が壊滅的な被害に遭った直後から、大本営と皇居を移転する計画が具体的になり、全国的な調査の結果、松代町の南にある象山・舞鶴山・皆神山の三つの山に総全長10キロメートルにも及ぶ巨大な地下壕を建設することになりました。建設作業には朝鮮半島から徴用された朝鮮人が中心となり、最盛期には朝鮮人と日本人合わせて1万人が働いていたとされています。作業は1944年11月11日から1945年8月15日の終戦まで続けられ、予定の75%まで終了していたとのこと。現在は象山の地下壕約500メートル余りが一般に公開されています。実家からすぐ近くなので小さい頃は毎日のように遊びに行っていました。不謹慎ですが、地下壕の中は夏涼しく冬暖かい、最高の遊び場でありました。少し地元の紹介が長くなりましたが、こうした歴史深く自然豊かな松代に育ち、文武両道とはいかないにしても力強く育ったということは間違いのないでしょう。

ちょうど私が生まれる前ぐらいに父親の高校時代の柔道部の先輩が、町に柔道の道場を開きました。松代藩の武道教育が行われた「文武学校」（現在も当時の建物が残り、公開されています）に因んで「文武館」という名前の柔道教室を開催したのであります。父親が師範をする道場で3歳から柔道を始めました。当然私には始めた頃の記憶は有りませんから、気づいたらもうやっていたという感じです。小学生を中心に20人弱がやっていたと思いますが、当時は通ってくる子供も松代町内の小学校の子供ばかりでした。なかなか市の大会でも優勝することは難しかったのですが、私の一つ上の代あたりから粒が揃い始め、今では人数も40人を超え地区大会では負け無しの道場となりました。私が小学生の頃は、町の小学生が集まって道場で柔道を習って、そのまま皆が同じ中学に入

学していきましたが、私が中学生の時ですら中学の柔道部は存在したものの柔道専門の指導者がおらず、中学の柔道部は弱小でした。折角町に小学生が柔道を習う機会があるのに、中学でそういった機会が得られないのは残念なことです。町の子供を鍛える道場は、地元の中学校や高校の部活動の基盤ともなり、小学校以外での人間関係構築や精神教育・礼儀作法の教育に大きく貢献できるものです。今では中学にも柔道専門の先生が来て下さり、全国大会にも出場するほどの強豪校となりました。こうして小学生で柔道を習いに来る子供が増え、皆で切磋琢磨することに中学や高校でも活躍する選手が現れ、色々な方面で交流を深めて人間関係を築き上げ、また道場に還元してくれるようになりました。

私の中学の先輩は、本人も高校の時はインターハイでベスト8に入る程の選手であり、帝京大学在学中には谷亮子（旧姓田村）選手の付き人として役割を果たして、今は子育ての合間をぬって週に一度ぐらいは指導に駆けつけてくれます。また、私の中学の時の一つ下の後輩は日体大在学時に、バルセロナオリンピックの71kg級金メダリスト・古賀稔彦氏の開催する道場で子供たちに柔道を教え、我々の道場と古賀先生の間を築き上げてくれました。その関係もあって、今年4月には我々の道場に古賀先生をお招きして大会を開催しました。最近はあまり日本柔道の国際大会での成績が芳しくないためか、なかなか皆さんご存じないかと思いますが、アトランタ五輪金メダリストの恵本裕子や、アテネ五輪金メダリストの上野雅恵、アテネ五輪銀メダリストの横澤由貴が所属する三井住友海上の女子柔道部の監督をされている柳沢久監督は我々の高校のOBです。ソウル五輪では女子の監督として赴き、現在でも国際大会にはコーチ陣の中心的役割をされている方ですが、不定期に長野へ選手を伴って来られることがあって、その度に我々の道場へ訪問して下さり、高校生は練習相手として世界トップレベルの技を体験できます。

兎に角、二十数年前に始めた町の小さな道場がこうして徐々に規模が大きくなり、多くの門下生

を排出し、こうして歴史ある町に再び活気を齎してくれています。しかしながらそれとは対照的に、ここ何年か歯学部の入学定員が減ったせいもあるのでしょうか、なかなか柔道やラグビーの経験者がおられません。また未経験者でもこうした格闘系のスポーツをやりたがる人が少なくなったような気がします。スポーツはどれも厳しいものですが、特に格闘系のスポーツにおいては怪我も多く練習もハードです。肉体的にも逞しさが要求されます。ですがこうした日々の研鑽が必ず勉学の際の集中力に繋がります（私は冗談ではなく本当に繋がらなくて困っていますが）。これから歯科医師は社会的に厳しい状況に置かれていきます。こうした中で頼りになるのは縦の関係や歯科医師という枠組みを超えての横の繋がりと信じています。縦の関係を通じて歯科医師としての関係を築き、横の関係を通して様々な業種の人々と知り合い、一人の社会人として自立する糧とする、こうした人間関係の基本的な構図を描くためにはまず動かなければなりません。そうです、運動を一所懸命にやるということです。何か一つ馬鹿になってやることです。人それぞれ熱中することはあるかと思いますが、私はもっともっと多くの人に柔道をここ新潟大学歯学部で経験していただきたいと思います。その暁には私の柔道関係の全てを以って全国の歯学部柔道部では最高の環境を提供できると確信しております。



高校時代、いつも県大会個人戦決勝で戦っていた相手の角田卓也氏（写真右）。

ただの一度として私が勝った例が無い。高校時代は2年連続のインターハイ出場を果たしています。現在は刑務官として働いています。この日のためにわざわざ駆けつけてくれました。心からの親友です。

予想外の優勝

歯学科5年 大 墨 竜 也

昨年の夏、卓球部主将として迎えるデンタルに、まさか部門実行委員長として参加することになるうとは。記憶は定かではありませんが、私自身知ったのは4年になったころではなかったかと思いません。その頃はまだ実感もなく、新潟じゃデンタルついでの観光もなくつまらないなあなんて楽観的なものでした。

しかし、その年のデンタルは今までとは心持の違うものとなりました。いよいよこれは大変なことになると。レセプションでは部門主管である東京歯科大学をはじめ、参加校の代表者に挨拶にまわり、お酒の注ぎつ注がれつの攻防を凌ぎ、なんとか連絡先を交換。来年への下地作りに奮闘でした。この後から大会まで、ここでは語り尽くせない、部員全員での大会運営準備の仕事の山との格闘がはじまりました。

全くゼロからのスタートで、過去の大会資料の確認から始まりました。ちょうど5年前私が入部する前年、新潟が部門主管を務めたときの実行委員長であった先輩が学内にいらっしゃったことも救いでした。会場の体育館確保、予算案作り、パンフレット作り、各大学との連絡等の前準備を部員で分担しながら進め、なんとか当日を迎えることが出来ましたが、中でも大変だったのは、各大学との連絡でした。参加要綱などの返事がなかなか返ってこず、こちらの作業を進めることができないという状況もありました。これを読んでくださる部活の代表者の方、他大学からの連絡の返事は早めに出してあげてください。なんの応答もないことは、相手に伝わっているかどうかもわからず、不安感を与え、信頼関係を損なうことにも繋がりがねないということを、私自身学ぶよい機会となりました。

しかし、この当日の大会運営にこそ難点がありました。運営するこちら側もちろん選手として大会に出場するわけで、部員のほとんどが同時に試合に出て行かなければならないという状況が想

定されるため、本部に常にいることができ、アナウンスなどもやってもらえるメンバーが必要でした。

そこで、全学、医学部の卓球部員に協力を求めスタッフの確保を行いました。それによりこちらが試合にも集中することができ、以下で記すような結果にこれが功を奏したことは言うまでもありません。

近年、我が卓球部は男子の数が少なく、結果のほうも女子に押され気味でありました。実際、私の下には男子が2年入らず、4年になって初めて男子後輩が入ってくれ、彼がまた中高経験というツワモノで一気にレベルアップしました。これにより私のデンタルでの荷物持ちから昇格となりました。もともと歯学部卓球部は初心者が多く、選手は大学から始めて部員同士、切磋琢磨しながら技術を磨いていき、そういった中でも結果が出せるという醍醐味があります。この記事はホームページからも閲覧可能ということで、これからの新入生向けにも部員勧誘の一環として宣伝させていただこうと思います。詳細は歯学部HP部活紹介もご覧ください。

ただ、今回のデンタルでは女子の活躍は特筆すべきことだったと思います。顧問福島先生が理事会でご尽力もあり、今大会第39回から歯学科だけでなく、衛生士、技工士の学生にも出場の機会が広がったのです。新潟は特に口腔生命福祉学科に女子の卓球経験者が2人おり、この影響は大きく、結果、女子団体優勝、個人ダブルス優勝と2冠達成となりました。男子は決勝トーナメントで団体優勝となった長崎と大接戦を繰り広げた末に、最後主将の私が試合を決定付ける負けを喫してしまい、大変悔しい思いもしましたが、結果、奇跡的に長崎大学とポイントが並び、2校総合優勝となりました。長崎大学とは試合後に一緒に飲んだり交流も深められ、新潟から遠く離れた仲間もでき、これがデンタルの楽しみではないでしょうか。

今大会での14年ぶりの総合優勝は選手をはじめ、先生方も全く予想せぬ結果でありました。私自身、運営に気が取られ、3日目の大会最終日になり、獲得ポイント数を途中集計してみてもわかったというようなもので、振り返ってみれば、そのときは様々なトラブルが起き、それに対処することに悪戦苦闘で、無事に運営できてよかったと実感できたのはしばらく日が経ってからでした。

新潟としては主管を務め、さらに優勝も勝ち取ることができたこの結果は、OB・OGの先生方のご声援、大会運営の補助をしてくれた学生の協力があってこそであり、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

5年後のデンタルは総合主管として新潟で開催されると聞いております。その際には、デンタル運営の経験者として運営側のお役に立てればなあ

と考えています。やはり地元開催というのは忙しくもありますが、コンディション作りにはメリットです。国体は開催地の都道府県が歴代優勝しているそうです。新潟での開催となれば、OB・OGの先生方も応援に来られる機会が多くなると思いますので、こういったことがプラスにはたらくのではないのでしょうか。

現在、卓球部の悩みとしては、新入部員を1人でも多く入れたいということに尽きます。せっかく今回結果を残すことができたにも関わらず、特に男子の部員不足で最低4人でチームを構成する団体戦に出られないという事態になりかねないという状況で、いつでも部員募集中です。男子、女子問わず少しでも卓球に興味のある方、経験のない方でも全くかまいませんので卓球を始めてみてはいかがでしょうか？



数々のトロフィー・賞状を勝ち取った卓球部一同



追記

平成19年度の学友会表彰として、学生個人表彰部門からは口腔生命福祉学科の平林友香さん（歯学部卓球部）、学生団体表彰として歯学部卓球部、歯学部女子硬式庭球部が選出されました。全学を通して個人表彰は3名、団体表彰（体育会系）は6団体であったことから、歯学部体育会系の活躍がいかによろしかったかがうかがえます。今後の活躍にも期待したいと思います。

（文責：編集委員 井上 誠）



卒業おめでとう

歯学部長 前田 健康

歯学科第38期生の皆さん、口腔生命福祉学科第1期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。卒業までの道りは決して平坦ではなく、山あり、谷あり、つらいこと、悲しいこと、いろいろあったでしょうが、それらすべてを乗り越え、無事、卒業の日を迎えたことを心よりお喜び申し上げます。

この春からは歯科臨床研修医、歯科衛生士、行政職、大学院生など、それぞれの道に進みます。歯学科、口腔生命福祉学科ともに小さなクラスでしたが、ともに学び、遊び、悩み、喜び、悲しみを共有しあった同級生は諸君たちの一生の良き友です。進む道は各人で異なるものの、歯科医学、歯科医療、口腔保健、社会福祉に携わり国民の健康の維持・増進に寄与するという諸君たちの目標は同一であると思います。ただし、残念ながら諸君たちの4年間、6年間の学業は歯科医療・口腔保健従事者としてはまだ必要最低限のもので、いわば諸君たちは、今また新たなスタートラインに立ったばかりです。新潟大学歯学部の教育課程は国家試験に合格するという短期的な目標で組み立てられているのではなく、我々歯科医療・口腔保健・福祉従事者が一生涯学び続けるために必要なスキルを身につけさせるという長期的観点から組み立てられています。社会は、医療人に対して幅広い教養、豊かな感性、きびしい倫理感をもっていることを求めています。これらは今までに受けた教育だけでは不十分で、生涯を通じた学習、研修によって得られるものです。諸君たちは共通の目標に向かって、さらなる精進が必要です。そのためには自分をさらにスキルアップするための目標を設定して努力してください。このことは現在の競争社会で生き抜いていくために必要不可欠なことです。特に卒業直後の数年間が君たちの将来

を決定するといっても過言ではありません。目先のことにとらわれず、最終目標に向かって努力しましょう。諸君たちが学んだ新潟大学は独立行政法人化されたとはいえ、大学の収入の多くは国からの運営交付金です。すなわち、国民の税金で君たちは学んできました。卒業して社会に出ていく皆さんは、特に国民を意識して国民に貢献できるよう、また君たちが学んで得たものを社会に還元できるよう努力してください。社会はそれを強く求めています。

「人生50年」という言葉がありました。The World Health Report 2006によれば、我が国の平均寿命は男性で79歳、女性で86歳です。平均出生率は2を割り、10年前の1997年には合計特殊出生率が人口置き換え水準をはるかに下まわり、かつ、子供の数が高齢者人口（65歳以上人口）よりも少なくなった社会、すなわち少子社会になっています。諸君たちが在学中に何度も聞かされた少子高齢化が急速に進んでいきます。一本の歯から口腔へ、口腔から全身へ、一人の人間から社会へと目を向けていく必要があります。得てして人間は狭い領域を深く掘り進む傾向にありますが、大局的な見地でもものを見据えていく必要があります。また人口構造の変化に加え、疾病構造も複雑に変化しています。さらに新しい歯科治療法、材料が開発され、歯科臨床応用されています。このような激しい変革の中で諸君たちは「真に必要なものは何か？」を見極める目が必要です。その際、諸君たちが大学生活で身につけたスキル、科学的な目で取捨選択していきましょう。

諸君たちの今後の活躍を大いに期待しています。君たちの母校、新潟大学歯学部はいつまでも君たちのサポートを続けていきます。



卒業生に贈る言葉

医歯学総合病院副院長 齊 藤 力
(歯科担当)

歯学科第38期生ならびに口腔生命福祉学科第1期生の皆さん、卒業誠におめでとうございます。皆さんは歯学部での課程をすべて修了し、晴れて学士の学位を授与されました。これまでの努力とその成果を賞賛するとともに、光り輝く未来を心から祝福いたします。

新潟大学歯学部での学生生活はいかがでしたか？ 振り返るといろいろな出来事があったことでしょうか。旭町キャンパスで過ごした青春の思い出は、皆さんの一生の宝となるはずです。そして新潟大学で学ぶ機会を与えてくれたご家族に感謝してください。

歯学科を卒業した皆さんの多くは、歯科医師として臨床や研究の第一線で活躍することとなるでしょう。新潟大学で学んだ知識や技能は歯科医師としての基礎となります。卒業後はこの土台に何を積み重ねていくかが勝負であると思います。現在の歯科医療を取り巻く環境は複雑なものがあります。しかしながら地道に努力を重ねたものに対しては、必ず明るい未来が切り開けるはずです。歯科医療は日進月歩であり、生涯に渡って学習を継続することが欠かせません。専門分野・領域を探究することも大切ですが、歯科医師の専門は歯科であるということをぜひとも忘れないでいただきたいと思います。すなわち総合的に顎口腔領域の疾患を治療、予防し、機能を回復させることが歯科医師に求められているのです。また研究にお

いても歯科医師ならではの視点を忘れないでほしいと思います。これは臨床研究だけでなく、基礎研究においてもいえる事です。知的好奇心を失うことなく一步一步努力を重ねていってください。

口腔生命福祉学科を卒業した皆さんは第1期生ということもあり、何かと苦労が多かったことと思います。先輩がいないということは、さぞかし心細かったことだったと思います。口腔生命福祉学科の歴史の一步は皆さんが作り上げてきたものであり、そして、これからもその役割は続きます。卒業後は社会福祉士、歯科衛生士として活躍する人が多いのではないかと思います。これから始まる後期高齢者医療制度のもとで、あるいは障害者医療の中で皆さんに求められる要求はますます高まっていくことでしょう。生涯学ぶ姿勢を持ち続け、ぜひとも後進の指導もできるプロフェッショナルになっていくことを期待しています。

新潟大学医歯学総合病院は使命として優れた医療人を育成する卒後研修プログラムを作成し、歯科医学、歯科医療の様々な分野で将来リーダーとして活躍する皆さんを、全面的に支援したいと考えております。卒業後も何かありましたら医歯学総合病院歯科を訪ねてください。皆さんの“学びたい”という意欲に応えていきたいと思います。充分に実力をつけ、世界に向けて羽ばたいていくことを心から期待しております。

卒業にあたって

歯学科6年 伊藤 恭輔



1年生の6月、歯学部ニュースの原稿を依頼されてから、もう6年。あつという間の6年間でした。そのときは、「これからの6年で何が起ころかすごく楽しみです。」と締めくくっていた自分。この学生生活で何が起こったのでしょうか。部活の度にご飯をおごってもらっていた1年生。セルにひいひい言ってた2年生。毎週のように飲みに行ってた3年生。デンタルで九州まで行ったのに1回戦で負けて、1週間かけて日本中遊びながら新潟まで帰ってきた4年生。ポリワリが始まり、ストレス回避のためにトランプやってた5年生。そして、総診の6年生。

今思い起こしてみると、その年その年で色々な思い出がありました。そのなかでも、切り離せないのは部活の思い出でしょう。たぶん。小・中とサッカー部だったので、大学でもまたサッカーやりたいなあと軽い気持ちで入ったサッカー部。大学入ってこんなに真剣に走り回るとは思いませんでした。夏のデンタルに向けて毎年チームを作っていくわけですが、正直きつい時もありました。それでも頑張れたのはみんなとやるサッカーが楽しかったから。試合の後マネージャーさんに笑っててほしかったから。夏のデンタルではずっと思うような結果が残せず苦しかったけど、5年のときの試合後のうれし涙は忘れません。「笑って終わろう」と臨んだ6年のデンタル。絶対に忘れません。やつとの思いで掴んだ1勝。届かなかった1勝。どれも忘れません。みんなとサッカーできて本当によかった。ありがとう。

中身の濃くて、これからの人生では味わえないような充実した6年間。そんなこんな思い出は書ききれないので、最後はやっぱり総診での臨床実習の日々を。

5年生の11月、総診での臨床実習が始まりました。患者様には時に不安な思いをさせたり、分か

りやすく話そうとしすぎて混乱させたりもしました。長時間の診療は嫌になることもあったでしょう。でも、常に笑顔でいてくださいました。こんな優しい患者様がいたからこそ、1年間やり通せたのだと思います。ありがとうございました。臨床実習中は、教科書通りにいかないことが多く、いつもいっぱいいっぱいでした。ライター・技工士の先生方にはご迷惑と知りつついつも甘えてしまうことも多々ありました。ありがとうございました。

大学を卒業し、国家試験に合格すれば歯科医師としての道を一步踏み出すこととなりますが、そこは事上練磨、これからも常に勉強し腕を磨いていきたいと思います。

ほんつとに楽しい6年間でした。ありがとうございました。

卒業にあたって

口腔生命福祉学科4年 梅澤 佳世子



早いもので、新潟大学に進学してから4年の月日が経とうとしています。

入学前は、私は新潟のことを全くと言って良い程何も知りませんでした。しかし、実際に生活してみて、道路には沢山のバスが走り、買い物も不自由なくでき、とても住みやすい土地でした。お米やお酒、海の幸はとても美味しく、自然も豊かでした。学校からすぐそばには、広い日本海がきらきらと輝き、海なし県の群馬からやってきた私はとても感動しました。冬は、想像していた程の雪は降りませんが、冷たい風や雨・雪が降り、1年間に傘が何本も折れたり、夜中にアパートの前をもの凄いい音をたてて除雪車が通ったときは何とも言えない恐怖を感じ、これから先の新潟での生活に不安を覚えましたが、そんな自然環境にも段々と慣れていき、今は少しは順応したつもりです。

さて、学生生活を改めて振り返りますと、実に様々な出来事が思い出されます。

その中でも、まず最初に思い浮かぶのが、部活動のことです。私は全学の管弦楽団に所属していました。150名を超える大所帯ですが、団員1人1人が、一つの音楽をつくる、という目標に向かって、ひたむきに練習や意見交換を行い、とても気合の入った部活でした。そういったなかで、音楽に限らず様々な悩みや喜びを分かち合う仲間に出会えた事はとても大きな収穫だったと思っています。3年生になり、部活を執行する際、私は飲み会を仕切る係のトップに配属されることになりました。少々ふざけた感じに捉えられる係ですが、これは、管弦楽団にとって結構重要な役割を持つ係でした。みんなで音楽をつくりあげていくには、演奏の場以外に、音楽に関してお互いが腹を割って話す場が必要であり、その場が飲み会場であることがしばしばでした。部活の組織が大きいので、全員が気分よく過ごせるように、部長やコンサートマスター、他の係、飲み会場のお店の人、音楽を教えてくださいの先生方との連絡調整がとても重要でした。そこで感じた事は、どんなに小さな事柄においても、お互いの意見を誤解なく理解しあうのは難しいという事でした。一方通行では物事がうまく運ばず、お互いが理解してはじめてうまくいくものだという事を、身をもって体験しました。

部活動で学んだ事は大学の授業の中でも感じる事ができました。口腔生命福祉学科では、歯科保健と社会福祉の両方を学んできました。歯科保健と社会福祉の2分野は、もともとは異なったフィールドにありますが、その両者を上手く連結させるには、医療・福祉などの関係者、クライアントとの連絡調整は不可欠であることを学びました。また、私たちは1期生として、4年間で学習してきた比較的新しい概念を、関係者や身の回りの方に誤解を最小限にとどめて伝え、実践や研究の場で活動する責任があると感じています。それには、ただ持論を展開してだけでなく、互いの言い分を理解しあいながら進めることが必要なのだと思います。言うは易し、行うは難しですが、この4年間で学んできた様々なことを、これからは、より知識や理解を深めうまく社会に還元していきたいと思っています。

最後に、歯学部 of 諸先生方、病院スタッフの方々、そして、共に沢山の思い出を作ってくれた同期の友達に心から感謝申し上げます。

6年間を振り返って

歯学科6年 鴻巣 理紗子



新潟には祖母の家があり、幼い頃から毎年遊びにきていて馴染みがありました。が、まさか住むことになるとはその当時は思ってもいませんでした。遙々茨城より、新潟に移り住み大学

生活を始めて早くも6年が経とうとしています。この6年間を振り返ってみると、楽しかったこと、辛かったこといろいろありましたが、この度無事に卒業を迎えられることを嬉しく思います。

1年生では、時間に余裕があったことを利用して、部活やバイト中心の生活でした。

2年生では、細胞生物学‘THE CELL’が始まりました。高校生のときに生物の調べものをした際に図書館で‘THE CELL’を手に取り、分厚くて難しそうな本だという印象で数ページ読んで満足してしまっていたことがありました。その時の本が偶然にも大学の教科書となり、約半年かけて1冊習うことになったことに最初は戸惑いましたが、戸惑っている間にも次から次へと試験が始まりましたので一生懸命勉強したことが印象に残っています。

3年生では解剖学実習、4年生では各科の模型実習が始まり、なかなか思うように実習が進まなかったり、失敗してしまったりすることがありました。この頃から臨床科目が増えてくるとともに、将来について考えるようになってきました。今までは出来ないことがあっても、自分だけの問題で終わりましたが、これから社会に出た際には自分が行なったことは自分だけの問題ではなく、むしろ周りの方々に迷惑をかけてしまうことに繋がるのではないかと思うとよけいに落ち込むこともありました。そんな時は、一緒に頑張ってきた友達

と励まし合いながら乗り越えることが出来ました。

5年生では相互実習をしたポリクリと、私達の代から本格実施となったCBTとOSCEが印象に残っています。

そして5年生の11月から6年生にかけての臨床実習では本当にいろいろな経験をさせて頂きました。臨床実習では自分で望めばいろいろな経験が出来るようなシステムになっていて、私はあまり要領よく物事を行えないのでいろいろやり遂げられるか心配ではあったのですが、せっかくの機会なので何でも経験してみようという気持ちで、この一年間過ごしてきました。

自分の体力を過信して、診療での緊張が続いたり技工物があったり忙しい時に昼食をしっかりと取らなかった時期もありました。自業自得ではあるのですが体調を崩してしまい、しかし体調が悪くても行うべき事がたくさん有り休めないことになかなか治らず悪循環となってしまう際は、本当に健康管理の大切さを痛感しました。先生方を始め、周りの友達には何度も助けてもらいました。

また患者様には診療に長い時間がかかって負担をかけてしまったにもかかわらず、温かい言葉をかけて頂く事が多々あり、私の励みとなっています。

6年間の大学生活はあっという間でしたが、頑張った分とても充実した日々でした。

この6年間を通して言えることは、同級生、先生方、部活の先輩・後輩、家族など周りの人々にいろいろな面で支えていただいて無事卒業を迎えることが出来たと思います。ほんとうにお世話になりました。ありがとうございました。

まだ社会人としてのスタートラインに立ったばかりですので、これからも努力し後悔ないようにしていきたいと思います。

卒業にあたって

口腔生命福祉学科4年 濱松 亜由美



このたび、卒業にあたって歯学部二ニュースの原稿を書くことになりました。口腔生命福祉学科初の卒業生として、私の4年間について振り返ってみたいと思います。

1年生

五十嵐キャンパスでの教養の授業が主でした。聴講取りや学食など実に大学生らしい生活を満喫していました。いろんな授業が自由に受けられるシステムが気に入っていました。また、学生談話室や2食などもお気に入りです、毎日入り浸っていました。

2年生

旭町キャンパスに移動し、専門の勉強が始まり、大学生らしいキャンパスライフに終止符を打ちました。ほとんどすべての授業がPBLという授業スタイルで、慣れるまでは大変でした。特に解剖や生理学などは、自己学習が的外れだったため苦労しました。

後期になると、顎模型に歯石やマニキュアをつけてはスケーラーで落とす、という一連の作業を繰り返す日々でした。なぜか、滅菌の係りになる率が高く、オートクレーブをよく作動させていました。

3年生

編入生が10人仲間入りし、学科の人数が1.5倍になりました。様々な年代の人と仲良くできるのが不安でしたが、みんなフレンドリーでいい人ばかりだったので、すぐに仲良くなれました。また、編入生は私たちにとってとてもいい刺激となり、学科が活性化しました。

さらに、福祉の勉強が始まり、悪戦苦闘でした。年金や医療保険、高齢者問題や児童虐待など日本の抱える問題のオンパレードで、勉強していると日本の未来について心配になりました。福祉を勉強することで、社会についての関心がわいた気が

します。また、福祉の姿勢を学べたことは一生の財産だと思っています。

後期からは、少しずつ歯科衛生士の臨床実習が始まり、その大変さに、4年生からちゃんとやっ
ていけるのか不安になりました。

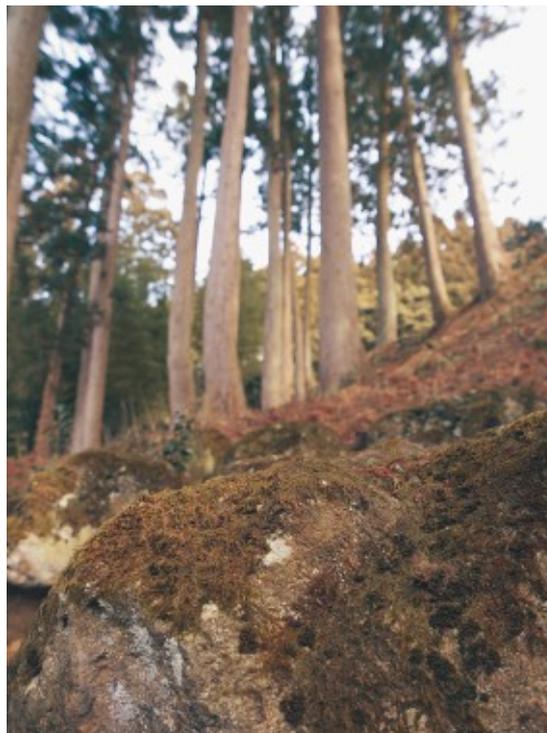
4年生

これは、ほんとよく乗り切った！ といった感じ
です。臨床実習だけでも大変なのに、社会福祉
士の現場実習あり、卒論あり、二つの国試あり(特
に福祉の授業は4年ではないため独自に進めるし
がありません。しかし、日々の生活に疲れてなか
なかできない……)、卒後の進路のための活動あり
……。本当に大変でした。

そんななか、実習先の患者様や利用者さん、そ
して歯科医師の先生からの「ありがとう。」は、本
当に救われる思いでした。これほど、「ありがと
う。」のすばらしさを感じたことはありませんで
した。人から何かをしてもらったときにちゃんと「あ
りありがとう。」と言える大人になりたいと思います。

最後に

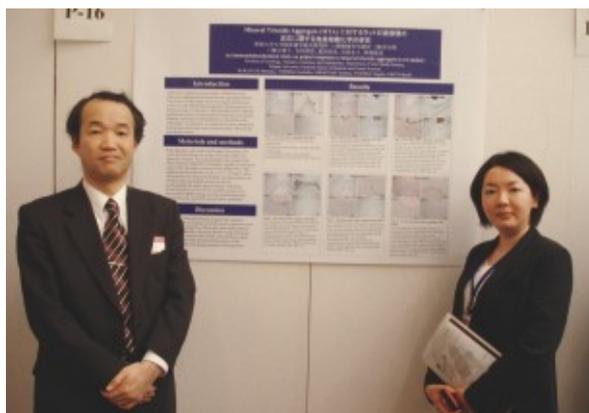
4年間振り返ってみて、ほんとみんなよくがんば
ったなあとしみじみします。これから卒業して、
みんなとバラバラになるのは寂しいけれど、一期
生として学科のみんながいろんな道で頑張ってい
くのを励みに、私も頑張りたいと思います。



大学院修了にあたって

大学院修了にあたって

う蝕学分野 鞍立 桃子



2004年10月23日夕方。市内某ホテルではう蝕学分野の同門会が行われており、私が入り口で受付係をしていたその時。建物が大きく揺れました。随分長いこと揺れていましたが、収まって一安心と思つたらまた揺れて。これは尋常な事態ではないと思つた頃に、どこからか「長岡が震度6！」との声。新潟県中越地震でした。幸い実家は倒壊等の大事はなかったのですが、お休みを戴いて片付けに帰る事になりました。大体片付いたと思つたのが余震で全部おじゃんになったり交通機関が止まったりして、2日で帰るつもりだったのが結局1週間居る羽目になりました。思えばこの日が普通の週末なら、私は実家で本震に巻き込まれていたかも知れないわけで、新潟大、中でもう蝕学のお世話になった事に運命的なものを感じます。……さすがに言いすぎかも。

そもそも、他大学出身の私がなぜ新大へやって来たかと申しますと、実はあまり深い理由はありません。あえて言うなら「他の大学も見てみたい」とか、「折角大学に残るならちょっと研究してみても良いか」程度の大変場当たりのな動機で、中でもう蝕学を選んだのは、たまたま御縁があったからという感じでしょうか。

入局一年目は、興地教授のアシスタントということで外来診療に携わりました。大学時代は臨床見学のみで、ほぼ患者様に触るとい事がなかった私はアシストどころか足手まといだったと思いますが、間近で大変ハイレベルな臨床を拝見させて頂いた事はとても貴重な体験でした。そして一年目の後半から、徐々に自分で外来診療を行うようになり、患者様を診療させて頂きました。毎日自分の至らぬ所に何かしらの後悔を覚える日々でしたが、大変勉強になりました。まだまだできない事だらけでこれから精進しなければと思いますが、大学院生としては臨床経験は多い方だったと思います。

研究については、入学後まもなく「充填用レジンのフッ素徐放性について」というテーマを頂いて、日々フッ素イオンの計測をしていました。二年目からは学会発表をさせて頂き、遠くへの学会出張に味をしめて以後、色々な土地へ行く事ができたのはとても楽しかったです。その後の研究内容は「直接覆髄材に対する歯髄の反応」というテーマにシフトして、う蝕学と並行して硬組織形態学のお世話になる事となりました。大学院生活も折り返し点というのに動物系に関する知識はゼロで、最初は毎週のセミナーについていく時点でやっとでしたがーから教えて頂いてついていけるようになりました。う蝕学には学年の近い先輩がいなかったのも、その点でも色々助けて頂きました。動物実験は、さすが生き物が相手だけあって時間的にも肉体的にも大変で、様々なイレギュラーに悩みつつ、ケージを抱えて何度も歯学部と動物舎を往復する日々でした。学会前の追い込みで、段々と右肩が痛むようになって医者へ行ったら「五十肩です」と言われてショックを受けつつ痛み止めを飲んで乗り切ったのが一番辛かったときですが、それまで本気で努力した事のなかった私がー皮むけたような気がした（たぶん錯覚ですが）出来事でもありました。

そうしている間にいつのまにか4年が過ぎました。もう少しで学生生活も本当に終わりかと思うと少々寂しい気もしますが、ここまで来る事ができたのは興地先生をはじめう蝕学と硬組織形態学の先生方、歯の診療室外来スタッフの皆様をはじめ、沢山の方々のおかげです。本当に感謝しております。臨床も研究も未だ出発点に立ったばかりですが、これから頑張っていこうと思います。

大学院修了に当たって

歯周診断・再建学分野 梶田 桂子



大学院に入学して4年、月日が経つのは早いもので楽しかった大学院生活が終わろうとしています。進路に迷っていた6年生の時、歯周科の抄読会に参加する機会がありました。内容は歯周病原性細菌とアテローム性動脈硬化症の関係性を報告した1編の論文だったと思いますが、わかりやすくかみ砕いて説明してもらったにも関わらず当時の私にはほとんど宇宙語に聞こえ理解出来ませんでした。しかし、宇宙語で熱のこもった討論を繰り広げる先生方が総診で見ていた先生とは同じ人物には見えなくて……。すごい事を勉強・研究している人達がいるものだな、私も仲間に混ぜてもらいたいと思ったのが歯周科の門をたたいたきっかけです。

若干ミーハーな気持ちで始まった私の大学院生生活ですが、いま改めて振り返ってみてここは頑張ったといえる事が大きく二つあります。まず一つ目は英語です。最初の頃はアブストを読むのに一日かかったり、全訳してもその日本語の意味が分からなかったりと苦労しました。しかし、ジャン先生の講義で英語科学論文の書き方・読み方を勉強したこと、英語で書かれた説明書や日々発表される論文など英語とは無縁ではられない生活を過ごした甲斐があり、いまでは英語に関して抵抗がなくなりました。二つ目はもちろん研究!!です。これまた最初の頃は顕微鏡を両目でみるの

もままならない状態で、教えてくださる先輩には多々ご迷惑をかけたかと思います。しかし、先輩方の苦勞をよそに私自身は、血液からDNAを抽出しては感動、細胞がすくすく育つては感動、遺伝子導入で組み込んだ形質が発現しては感動と一日一日、新しい手技を覚えていくのがとても楽しかったです。そんなこんなで実験手技に慣れて来た1年生の後半になると研究テーマを与えてもらいました。いざ一つのテーマに取り組んでみると、結果は思うように出ません。しかし、つらかったかと聞かれるとそうでもなく、上手くいかなかった点を改善したり、教科書に載っている様な事実を自分でも再現できて喜んだり、思ってもいない結果に驚いたり一喜一憂しているうちに月日が流れたという感じです。その中でも3年生のクリスマスに学位論文が国際誌にアクセプトされ大きなプレゼントとなったこと、その学位論文がPubMedで検索できるようになったことは大きな喜びでした。また国内および国際学会にも参加する機会に恵まれました。ニューオリンズで行われた国際歯科学会で発表し海外の研究者達とディスカッション出来たこと、年2回の国内学会でその道のエキスパートの先生方からアドバイスを頂いたり、同じ研究をする大学院生と意見交換が出来たりしたことは研究を続けるモチベーションになりました。今後は、これらの経験を糧に研究に臨床に精進していきたいと思っております。

最後になりましたが、このような機会を与え、熱心に指導をしてくださった山崎先生、吉江先生をはじめとする歯周科の先生方、研究面の相談だけでなくプライベートでも仲良くしていただいた大学院の先輩や同期、後輩のみんなに感謝しております。ありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願い致します!

大学院修了に当たって

顎顔面口腔外科学分野 庭野 将 広



ジャズの本場は最高でした。国際学会で発表の機会を与えていただき、ニューオーリンズで開催されたIADRに参加させていただきました。学会会場では何とか英語を聞き取るのに精一杯でしたが、世界の歯科学でどんな事が行われているのか、最新の知見に触れることができました。また、夜は名物のザリガネとワニを食べながら、うまいビールを飲み、そしてBGMは生のジャズと一生忘れることのない思い出ができました。思えば学会の抄録を出してから半年間、それまで寄り付きもしなかった英会話のコーナーで本を買って勉強し、その日に備えました。英会話が役立つのはどちらかというと学会の外でしたが、少しのアクシデントも何とか拙い英語で乗り切ることができました。

さて、発表の中身である私の研究ですが、口腔解剖学分野で顎関節の発生、特に顎関節滑膜に着目した基礎研究をさせていただきました。滑膜は顎関節症をはじめとする顎関節疾患の病態形成に強く関与しているにも関わらず、滑膜細胞に関しての細胞生物学的な特徴に関しては未だ不明な点が多く残されています。それを少しずつ明らかにしていくための研究ですので、興味深く面白いものでした。研究といっても頭を使うだけでなく、狂ったように切片を切ったり、写真を撮って現象したりと超体育会系な部分もありましたが、そんな時にきれいなデータが得られると、とても嬉し

かったのを覚えています。もともとは顕微鏡を覗くのが苦手だった私ですが、前田健康先生、井上佳世子先生をはじめ、口腔解剖学分野のスタッフの方々から丁寧にご指導くださったおかげで、なんとかデータをまとめ、国際学会での発表、論文まで仕上げることができました。今は本当にホッとしています。

臨床では、大学での研修はもちろん、関連病院でも素晴らしい指導医の先生方に大変お世話になりました。全身麻酔の手術を執刀させていただく機会もあり、まだまだ未熟ながら口腔外科の面白さがだんだん分かってきたような気がします。自分が担当させていただいた患者様が治っていくのを毎日診察し、退院する時に感謝の言葉を頂いたときは本当にこの職業を選んで良かったと再認識させられました。口腔外科の疾患の中には生命に関わるものも含まれるため、つらい現実に向き合うこともありましたが、その中でも一生懸命に病气と闘う患者様からたくさんのことを教えていただき、それが自分の支えとなることもありました。

多くの良い経験をさせていただきましたが、今になって大学院生活を振り返ると、学ぶための姿勢が身についたことが一番大きかったと思います。当たり前かもしれませんが、基礎研究に関してはもちろん臨床で悩んだ際にも、解らないことや問題点を明確にし、熱意をもって解決していくことがとても重要なのだと実感しています。これからも、生涯学び続け、患者様に恩返しができるよう日々研鑽を積んでいきます。

そして、最後になりますが、心身ともに健康で頑張れたのは周りで支えてくれた人たちのおかげと思っています。いつも支えてくださった先生方、友人、家族にこの場を借りて深謝いたします。ありがとうございました。

平成19年度 大学院医歯学総合研究科博士課程修了者論文名

博士の専攻分野の名称	氏名(専攻)	博士論文名
博士(歯学)	SHARMIN FARHANA (加齢歯科補綴学)	Effect of post type and loading condition on the failure resistance and primary failure mode of flared canal teeth restored with fiber-reinforced or cast posts (ポストの種類と荷重条件がファイバーポストや鋳造ポストで修復した漏斗状に窩洞形成された歯根の破壊強さと初期破壊様式に及ぼす影響)
博士(歯学)	ALGUNAID TALAT HASAN (歯科矯正学)	Soft-tissue Cephalometric Norms in Yemeni Adult Males (イエメン人成人男性の軟組織のセファログラム分析)
博士(歯学)	YASSIN ALTAJ ALTIGANI HEMOUDI (歯科矯正学)	The effect of timing of secondary alveolar bone graft on craniofacial morphology in patients with unilateral cleft lip and alveolus (片側性唇顎裂症例において二次的顎裂部骨移植の時期の違いが顎顔面の成長発育に及ぼす影響について)
博士(学術)	SUKALYAN KUMAR KUNDU (口腔病理学)	Lymphatic involvement in the histopathogenesis of mucous retention cyst (粘液貯留嚢胞の病理組織発生機序へのリンパ管の関与)
博士(歯学)	鞍立桃子 (う蝕学)	Immunohistochemical Analysis of Nestin, Osteopontin and Proliferating Cells in the Reparative Process of Exposed Dental Pulp Capped with Mineral Trioxide Aggregate (Mineral trioxide aggregate による直接覆髄後の修復過程における、Nestin、Osteopontin、および増殖細胞の免疫組織化学的解析)
博士(歯学)	高橋 収 (予防歯科学)	地域在住日本人閉経女性におけるアタッチメントレベルと骨密度との関連
博士(歯学)	根子 淑江 (予防歯科学)	Long-term caries preventive effects of a school-based fluoride mouth rinse program in adulthood (小児期におけるフッ化物洗口経験が成人期のう蝕予防効果に与える影響)
博士(歯学)	松本 沙耶香 (予防歯科学)	The effect of antimicrobial periodontal treatment and periodontal maintenance on type 2 diabetes mellitus patients using serum adiponectin as a marker (2型糖尿病患者における血清アディポネクチンに対する抗菌的歯周治療と歯周メンテナンスの有用性)
博士(歯学)	川崎 勝盛 (小児歯科学)	小児の成長に伴う一口量とばらつきの変化に関する研究
博士(歯学)	庭野 将広 (顎顔面口腔外科学)	Immunocytochemical Localization of Caveolin-3 in the Synoviocytes of the Rat Temporomandibular Joint During Development (ラット顎関節滑膜の発生過程におけるカベオリン-3タンパクの免疫細胞化学的局在)
博士(歯学)	平野 千鶴 (顎顔面口腔外科学)	歯肉癌における Tetraspanin ファミリー遺伝子発現レベルの診断的有用性
博士(歯学)	江川 広子 (口腔生理学)	咀嚼・嚥下機能障害評価基準の指針策定に向けた介護保険施設実態調査
博士(歯学)	塚田 徹 (摂食・嚥下リハビリテーション学)	Effects of head posture and food consistency on the oropharyngeal swallowing (姿勢と食品の硬さが嚥下口腔咽頭期に与える影響)

博士の専攻 分野の名称	氏名(専攻)	博士論文名
博士(歯学)	RAHMAN MD. MOSTAFEEZUR (口腔生理学)	Comparison of the modulatory effects on the jaw-opening reflex among the different periods of mastication in awake rabbits (覚醒ウサギにおける異なる咀嚼期の開口反射の変調様式)
博士(歯学)	杉野 伸一郎 (口腔生理学)	姿勢や食塊の性状の違いがヒトのオートガイ舌筋の筋電図活動に与える影響
博士(歯学)	三瀬 泰 (歯科矯正学)	重度の上顎前突における治療前後の硬、軟組織側貌変化—外科的矯正治療と矯正単独治療との比較—
博士(歯学)	渡邊 洋平 (歯科矯正学)	歯根完成歯自家移植の長期臨床的術後調査—移植歯の成績と患者の評価について—
博士(歯学)	谷口 裕重 (摂食・嚥下リハビリテーション学)	Effects of food texture on the coordination between tongue pressure and propulsion of food bolus during the oropharyngeal phase of swallowing (食品物性が嚥下の口腔咽頭相における舌圧および食塊移送との間の協調に与える影響)
博士(歯学)	奥井 隆文 (歯周診断・再建学)	Characterization of CD4 + FOXP3 + T-cell clones established from chronic inflammatory lesions (慢性炎症性病変部より樹立した CD4 + FOXP3 + T 細胞クローンの性状解析)
博士(歯学)	梶田 桂子 (歯周診断・再建学)	Quantitative messenger RNA expression of Toll-like receptors and interferon- α 1 in gingivitis and periodontitis (歯肉炎および歯周炎組織における Toll 様受容体およびインターフェロン α の遺伝子発現定量解析)
博士(歯学)	土門 久哲 (歯周診断・再建学)	Early and preferential induction of IL-1 receptor-associated kinase-M in THP-1 cells by LPS derived from Porphyromonas gingivalis (Porphyromonas gingivalis 由来 LPS により THP-1 細胞において IL-1 receptor-associated kinase-M が早期かつ優先的に誘導される)
博士(歯学)	本間 祐子 (歯周診断・再建学)	Lower antibody response to Porphyromonas gingivalis associated with Fc γ R11b polymorphism (Fc γ R11b 遺伝子型と Porphyromonas gingivalis に対する抗体産生調節との関連性)
博士(歯学)	山口 人巳 (歯周診断・再建学)	植物タンニン配合シュガーレスガムが歯周健康へ与える影響
博士(歯学)	海野 秀基 (硬組織形態学)	Pulpal regeneration following allogenic tooth transplantation into mouse maxilla (マウス顎骨への歯の他家移植後の歯髄再生過程)
博士(歯学)	高森 泰彦 (硬組織形態学)	Capacity of dental pulp differentiation in mouse molars as demonstrated by allogenic tooth transplantation (マウス臼歯他家移植により明らかにした歯髄分化能)
博士(歯学)	原田 政広 (硬組織形態学)	Cell dynamics in the pulpal healing process following cavity preparation in rat molars (ラット臼歯窩洞形成後の歯髄修復過程における細胞のダイナミクス)
博士(歯学)	甲斐 朝子 (摂食機能再建学)	Does the head start to move preceding the mandible during jaw opening-closing movement? (開閉口運動時において運動開始は頭部が下顎よりも先行するか)
博士(歯学)	竹内 聡史 (摂食機能再建学)	下顎タッピング運動に伴伴する体幹動揺の立位と座位の違い

博士の専攻分野の名称	氏名（専攻）	博士論文名
博士（歯学）	相川 弦 （組織再建口腔外科学）	顎変形症患者の顎関節症状と骨格形態との関連
博士（歯学）	岩本 忠士 （組織再建口腔外科学）	閉塞型睡眠時無呼吸症候群患者に対する口腔内装置による治療効果の予測に関する研究
博士（歯学）	金丸 祥平 （組織再建口腔外科学）	ヒト口腔扁平上皮がん細胞株における VEGF-A、VEGF-C および VEGF 受容体の発現量に関する研究 （Expression Levels of VEGF-A, VEGF-C and VEGF Receptors in Human Oral Squamous Cell Carcinoma Cell Lines）
博士（歯学）	齊藤 美香 （組織再建口腔外科学）	口腔粘膜水分量に関する研究 1）口腔水分計の測定精度の評価 2）高齢者の口腔粘膜水分量の時間帯による変化
博士（歯学）	菅井 登志子 （組織再建口腔外科学）	Clinical Study on Prognostic Factors of Autotransplantation of Teeth with Complete Root Formation （歯根完成歯自家移植の予後因子に関する検討）
博士（歯学）	永井 正紀 （組織再建口腔外科学）	Skeletal Stability after Bimaxillary Orthognathic Surgery in Patients with Mandibular Prognathism: Titanium Versus PLLA-Resorbable Miniplate Osteosynthesis （下顎前突症患者に対する上下顎移動術後の顎骨安定性について—骨接合にチタンミニプレートを使用した群と PLLA 吸収性プレートを併用した群の比較—）
博士（歯学）	長谷部 大地 （組織再建口腔外科学）	Effects of mandibular setback surgery on oropharyngeal airway and respiratory function during sleep （下顎骨後方移動術が気道形態と睡眠時の呼吸状態に及ぼす影響について）
博士（歯学）	五十木 裕子 （顎顔面放射線学）	眼窩下間隙の CT 所見—犬歯根尖病変に起因する歯性感染の波及について—
博士（歯学）	齋藤 正直 （顎顔面口腔外科学）	Clinicopathological distinction of two categories of oral squamous cell carcinoma of the tongue: de novo and sequential types （舌扁平上皮癌における疾患区分概念：新規発生型と悪性転化型）



平成19年度 大学院医歯学総合研究科論文博士取得者

博士の専攻 分野の名称	氏名	博士論文名
博士（歯学）	原 仁	Fine needle aspiration cytology of basal cell adenoma of the salivary gland (唾液腺基底細胞腺腫の穿刺吸引細胞診)
博士（歯学）	藤山友紀	Relationship between tongue coating and halitosis in periodontally healthy subjects (歯周組織学的に健全な者における舌苔と口臭の関係)



臨床研修修了にあたって

臨床研修医修了にあたって

総合臨床研修センター 橋本 亜樹



歯学部ニュースは学部生の時から毎回楽しみにしており、新しい物が配布されるとまずは一通り顔写真を眺め、そして知っている先生方や先輩方を発見するとそこを中心に全体に目を通

していましたが、まさか自分がここに載るとは思ってもいませんでした。今回は臨床研修（歯科研修医）修了にあたって、この一年間を振り返りながら現在の感想や反省を記させていただきます。

国家試験の発表があってからわずか数日後、歯学部講堂にてオリエンテーションがあり、初めてその後一年間を共にする研修医のメンバーと顔を合わせました。それまでの6年間はずっと同じ面子で過ごしてきたので他大学生との出会いが新鮮に感じられ、とても緊張や興奮をしたことを今でも覚えています。

4月は各種オリエンテーションと相互実習を行い、5月から二人一組のペアにて指導医の先生方のもと、総合診療室での臨床研修が始まりました。研修を始めるまでは期待に胸を膨らませていましたが、いざ始まってみると自分の不甲斐なさに肩を落とす毎日でした。何をやるにもおっかなびっくりで手際が悪く、必要以上に時間がかかってしまうのです。特に総診での診療時間は基本的に一回の診療につき一時間半ですが、二時間・三時間とかかってしまうことも少なくありませんでした。今思うとその一番の原因は「診療に対する準備の甘さ」だと思います。その日に使う器具や診療手順の確認はもちろん、具体的に何時までにどこまで診療を進めるか、そのためには事前にどん

な準備（形成練習など）が必要か、思い通りに進まなかったらどこで切り上げるべきか、カルテはどうか、次回の予約はいつとるかなど、これくらいは予め考えておかなければ経験の無い研修医では診療を短時間で終わらせることは難しいのです。これらの事に気付いてからは、可能な限り短時間にて診療を行えたのではないかと思います。

総診ではただ単に歯科治療を行うだけではなく、受付や技工係、予診係、看護師支援係、総合案内といった役割が日替わりで定められていました。係をこなしている際には気がつきませんが、これらの係を通してこれから社会人として働いていくうえで必要な言葉遣いや接遇、また病院内の事務的な流れなどを学ぶことが出来ました。技工係では指導医の先生方や自分たちより2、3年先輩の先生方の診療アシストにつくことができ、先輩方の診療を見ているだけで教科書を読むよりもはるかに多くのことを学べ、また自分も同じように診療が出来るようになりたいと目標にしていました。時には任されたTek調整のTekがはずれなくなってしまうなどとても迷惑をおかけしてしまいましたが、今では苦くも良い思い出です。

総診以外の場所でも病棟、摂食・嚥下リハ室、顎関節治療部にて研修を行いました。そこでは普段、総診では経験することができないような全身疾患を持った方や高齢者への治療やケアの仕方を学ぶとともに、これからやってくる超高齢者社会の中で自分が出来ることは何かを考える良い機会となりました。また本来なら柏崎保健所での研修も予定されておりましたが、中越沖地震（2007.7.16）の影響で中止となってしまい非常に残念です。

さてここまでこの一年間を振り返ってみて、幹事を務めさせていただいたこともあり非常に忙しくて目が回りそうな時もありましたが、何事にも変えがたい様々な貴重な経験を積むことができま

した。また素晴らしい指導医の先生方や仲間、ペアにも恵まれ、非常に充実した研修医生活を送れたと感じています。今後はこの一年間で得たことを糧に、常に初心を忘れず、しっかりとプロ意識を持って価値のある歯科医師人生を送っていきたいです。

最後にこの一年間支えてくださった皆様、本当にありがとうございました。

研修終了にあたって

総合臨床研修センター 湯田 亜希子



3月に国家試験に合格し喜びに浸っていたのも束の間、あっという間に臨床研修が始まりました。私の場合は、前半は大学の外の歯科医院、後半は加齢歯科診療室というコースを選択しました。

5月、歯科医院での研修が始まりました。知り合いもない、見ず知らずの土地でやっていけるのかすごく不安でしたが、誰でもない自分が選択した進路だったので、あらゆることに出来る限りの努力をしてみよう、せっかくだから楽しんでこようと密かに決意しました。実際、歯科医院での生活が始まってみると、院長を始めスタッフの方々にあたたかく迎えてもらえて本当にありがたく思いました。最初の頃は、慣れない環境というものもあって、患者様と接するにも緊張と不安から手が震えていました。また、大学とは異なる診療ペースにも戸惑い、診療にも時間がかかってしまいました。小さなことから大きなことまで様々な失敗をし、院長やスタッフの方々には多大な迷惑をかけてしまいましたが、優しく時には厳しく、根気強くご指導を頂いて心から感謝しています。

また、グループホーム往診や多くの勉強会や研修会に参加できたことも大変有意義でした。柏市は介護予防に対する歯科の介入が進んでおり、新しい取り組みを目の当たりにし、多くの刺激を受けました。その中で、自分自身も将来やってみ

たい、関わっていきたいと思えることに会うことができたのは幸せだったと思います。

さらに休診日を利用して、数年前から興味があったかづきれい先生のリハビリメイクも中級まで履修することができました。盛り沢山で充実した5ヶ月間を過ごすことができました。

10月になって、加齢歯科診療室に配属となり、摂食・嚥下リハ室での研修が始まりました。障害を持っている方や入院されている方に対して、口腔ケア、摂食嚥下リハビリ、歯科治療を中心に行うのですが、最初は患者様それぞれの状態や動作のどこに注意を向けてよいのかわかりませんでした。指導医にご指導を頂きながら、至らない部分が多いながらも患者様と向き合っていく中で、患者様からとても多くのことを学ばせて頂きました。咀嚼という観点に限らず、嚥下という一連の動作を考察することで、ご飯が食べられる（飲み込める）ということの大切さ、喜びを改めて実感し、歯科医師がその評価や訓練の一端を担い患者様に貢献できるという喜び、難しさを経験させてもらいました。

ドライマウス、味覚障害外来での研修では、口の渴きや味を感じにくくなるのがどれだけ患者様のQOL低下につながるのかということを考えさせられました。また、そのような症状を訴えられる患者様の歯科治療に際してどこに注意を払うかということ、患者様の話を傾聴する姿勢の大切さを指導医に教えて頂きました。

この一年は、今までの知識、新たに勉強したこと、先生から教えて頂いたこと、患者様とお話したこと、全て無駄になったものはありませんでした。患者様の存在が励みにもなりました。

これから歯科医師を続けていくにあたって、知識を貪欲に学び、技術を自分なりに学びほぐしていくことはもちろん、当然なのかもしれませんが、患者様の気持ちを思いやることを忘れずにいたいと思います。

最後に、この一年は至らないことも多くあり、先生方、同期の研修医、衛生士さん、看護師さんなど多くの方々に支えられました。大変恵まれた環境で研修できたことを感謝します。ありがとうございました。

総合診療部に勤務して

歯科外来 看護師長 山田 秀子

歯科総合診療部に勤務して、2年8ヶ月になりました。少し総合診療部の全体像を説明したいと思います。12月現在で歯学科5年生55人、研修医47人（常時24人）が臨床実習及び臨床研修に励んでいます。受診される患者様の数に波はありますが07.11/1～11/30の1日平均数を見てみましょう。・予診（新患数）約6.0名・学生患者数約20.2名・研修医患者数約48.3名・手術件数（歯周手術、抜歯など学生、研修医合わせて）約1.9件という平均値になります。

高血圧症、糖尿病、心臓病など患っている方や、車いすの患者様など様々な方が来院されます。全ての方が安心・安全に治療が受けられ、また臨床実習、臨床研修が出来るようにと心がけています。学生の手術前には、一緒に準備し、説明を行い確認します。

そして日々の診療に必要な器具、器材の準備、点検を行うと共に、歯科材料の管理を行っています。歯科ユニットのトラブルも多いです。たとえば「水が出ませーん」→「水のコックが開いていませんでした」また「タービンが動きませーん」→「しっかり接続されていませんでした」感染対

策の指導も欠かせません。「滅菌器具ケースの中に、直接手を入れてしまいました！」→「ケース全部交換しました」

最近のことですが、総合診療部受け付けで、心臓発作を起こされた患者様や、内服薬の副作用による発作を起こされた患者様もおられました。緊急対応に緊迫の場面もあります。“いつ何が起るかわからない”と思うときもあります。

07.11/21～11/22は、群馬県高崎市において行われた全国国立大学附属病院感染対策協議会（少し長い名称ですが）に出席してきました。その協議会の内容と私の感想を述べたいと思います。協議会は、各大学病院の院内感染対策の諸問題を合同で解決策を考えようと発足した組織です。全体会で各分会と各病院の活動報告があります。そして質疑応答され協議されます。その中で、医療スタッフの役割という報告で深く心に残った言葉がありました。それはICTチームのあり方について、バーナードの言葉を引用し、チーム医療の大切さを訴えた内容でした。「共同の効果は、参加者の能力を加算するのではなく、この世に新しい命を生み出すことである」と。



歯系感染対策 WG は、院内感染対策委員会の組織下にあります。その WG そのメンバーの一員として、今後の歯科外来での果たす役割の示唆を与えられたと思いました。

歯科医師作業部会の内容としては、医学部附属病院と歯学部附属病院の統合や 7:1 看護体制の導入で、歯科外来での看護師の数が減少の傾向にあります。感染対策の中心的役割である看護師の少なくなる状況で、感染対策の充実、教育の在り方も今後の課題である等の意見が出されました。

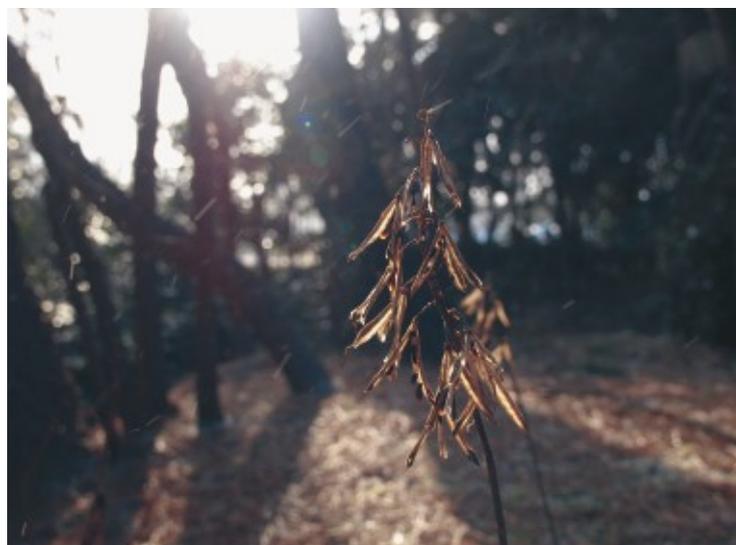
患者様の全身管理や生活習慣病の予防の指導を役目と心得ています。そこで私の常日頃心がけて行っている事を、少しお伝えしたいと思います。一つ目は、朝起きたらすぐに水か白湯をごくごく飲みます。もう20年近く続けています。たまには風邪も引きますが、軽くすんでいるのは、水のおかげと信じているところです。1日2L 飲むとよいといわれているようですが、水分制限のある人は無理ですね。二つ目は、プールで泳ぐこと。“プールの底に足をつかないで30分”あとはサウナに入ってリラックス。その後の爽快感はたまりませんね。そのほかには、チマチマと好きな事をやって楽しんでいます。皆様とご一緒に健康寿命を伸ばしていきたいと思えます。



右から。感染対策担当薬剤師・田村さん、感染対策担当医師・田辺先生、感染認定看護師・内山さん、口腔顎顔面外科・高木教授、感染対策歯科外来担当・山田



今年の干支「子」を作りました



素 顔 拝 見

医歯学系・助教（口腔生化学分野）

相 田 美 和

初めまして。平成19年4月1日から口腔生化学分野の助教としてお世話になっております。相田と書いて‘そくだ’と読みます。「そくだ！ そくだだったのかあ」と、子供の頃はクラス替えの度に新しい担任の先生が必ず口にする、小学生にもウケない冗談の後のシンと静まり返る瞬間がとても辛くて、自己紹介が大の苦手でした。今でも苦手ですが、初めましてのご挨拶が必要な方が大勢いらっしゃる身ゆえ、この場をお借りして少し自己紹介させていただきます。

私は福岡県北九州市の出身で、学生時代からこれまでずっと福岡県内で過ごしてきました。新潟が本州初上陸の地です。九州から見た新潟は、天気予報の画面に映る雪のイメージが強く、こんもりと積もった雪を連想しておりました。ところがこの原稿を書いている12月末現在積雪も無く、寒がりの私は少しほっとしています。以前はもっと降っていたということですから、地球温暖化の影響でしょうか、それはそれで心配ですね。福岡は中途半端に暖かいため、換気と称して廊下の窓やドアが全開になっていて建物の中でも寒いことがあったので、かえって今の方が暖かく快適に過ごしています。新潟は山々に囲まれた広い平野と日本海、とても自然環境に恵まれたところだという印象を持ちました。せっかく当地へ来たのですから、山に登ったり（ファミリー登山程度ですが）、佐渡の海に潜ったりしてみたいともくろんでいます。

仕事の方は、これまで細胞内膜輸送についてゴルジ体を中心にした研究をしてきました。慢性関節リウマチやシェーグレン症候群などの自己免疫疾患患者の自己抗体の中にゴルジ体と反応するものがあり、その抗原をクローニングしたのがきっかけです。それら抗原蛋白質はゴルジ体の形態維

持や小胞輸送に働いていることがわかってきました。歯科の臨床では馴染みが薄い内容ですが、歯学科の2年生で使う分厚い教科書、細胞の分子生物学13章で取り扱っているような基礎研究（の一端）です。直ぐに役に立つ、臨床に直結、というわけにはいきませんが、様々な生命現象の理解や臨床応用に繋がる研究の土台になればと思って続けてきました。

私は卒業が薬学部、前任地が医学部、そしてこの度縁あって織田公光教授のもと歯学部、と図らずも生命科学の学部を渡り歩いてしまいました。基本は同じ生化学でも、それぞれ学部によって考え方や興味の方向が大きく違って面白いです。歯学領域の生化学分野での現在の研究対象やこれからのニーズがどこにあるのか、今アンテナを張って模索しているところです。これまでの経験を活かして貢献できることを願っております。まだまだと言いますか、いつまでたっても修業中、学生時代よりも勉強しているのだから不思議なものです。普段は7階のペントハウス(?)に籠って地味に実験しています。千里の道も一歩から。地道な作業の合間に眺める教室からの景色は素晴らしく、遠くの山々が白い帽子をつけるのを半分楽しみに、半分恐々待っています。皆様どうぞよろしくお願い致します。

*



医歯学総合病院・助教
(摂食・嚥下機能回復部)

梶 井 友 佳

こんにちは。平成19年2月より摂食・嚥下機能回復部の助教になりました、梶井友佳です。平成11年に日本大学の歯学部を卒業し新潟へやってき

ました。この世に生を受けてから大学を卒業するまで東京の親元でぬくぬくと育ってきた私でしたが、新潟に来て9年が経とうとしています。新潟大学の大学院へ進学、小児歯科を専攻し、研究は口腔生理学講座で嘔下や味覚に関する基礎研究を行いました。大学院時代の研究内容が嘔下だったこともあり、このたび摂食・嘔下リハビリテーション学分野に移動となりました。小児から高齢者まで幅広く知識と技術を身につけるチャンス！と思いついたのですが、全く違う分野での一からのスタートは想像以上に大変です……でも、学生時代にスキー部で身につけた体力と根性で日々外来と病棟を走り回っています。

今回「素顔拝見」を仰せつかっていったい何を書こうか……とかなり悩み、いくつか原稿も書いてみたのですがまとまらず、結局私の原点である両親について書こうと決めました。実は、この原稿を書いている時点ですでに編集委員の先生から「原稿ください」のメールが届いていました……遅くなって申し訳ありませんでした。

私の両親は、歯科医でした。東京医科歯科大学を卒業し大学院へ進学、父は補綴学、母は小児歯科学を専攻し、その後開業しました。同じビルの同じフロアで同じ日に別々に開業し、その年に生まれたばかりの私はすぐに保育園へ預けられました。保育園のおかげでやんちゃで活発な幼少期を過ごしました。小学生の頃は、両親が共働きであったため、春休み・夏休み・冬休みには3つ上の兄とともに泊まりがけの〇〇教室（スキー教室とかサマースクールとか）に行かされました。当時は家族や友達と遊びに行けないことを不満に思っていました。今思えばかなり贅沢な子ども時代でした。そして、自分にも子どもにも厳しく、休まずよく働く両親でした。

開業して33年目に体調不良もあり母が歯科医院を閉院しました。母と同じ小児歯科を専攻した時から、母の歯科医院を継ぐことは頭の片隅にはありましたが、母はそれをよしとしませんでした。

「この医院はもう古い。開業するなら、あなたの医院を新しく自分で作りなさい。私もそうしてきたのだから。」そう言って、私の未来への可能性を優先してくれたんだと思います。閉院前の1年間、

私は毎週末東京へ帰り、母の診療を学び閉院を手伝い、その精神を継いだつもりでいます。

それから1年後、私の小児歯科から摂食・嘔下への移動が決まった年、父が急死しました。あまりに急だったので、父の最期に私は立ち会えませんでした。前日まで現役の医院長として仕事をしていたので、父の死を悲しむ間もなく次の日から予約の入っていた患者様の対応に追われました。結局、父の死から1ヶ月後に父の歯科医院は閉院することになりました。患者様の紹介や閉院の手続きをする中で父の患者様に対する思いに初めて触れ、もっと父から学んでおくべきだったという気持ちでいっぱいでした。残されたカルテや模型を覗いては、聞きたいことがどんどん出てきて死に急いだ父を恨みました。

あれから1年、父の喪も空けて年末年始に母と二人で旅行しました。仕事について、父について、思う存分語る余裕がようやく出てきた母との旅は最高でした。先に逝ってしまった父への恨みから始まり、そのうち楽しい思い出話に花が咲き、そしてこれから先のことへと話は進みました。最後に母は「人はこうやって悲しみを乗り越えてゆくんだね」とつぶやきました。かなり贅沢な旅だったので懐が痛みましたが、これからも母との二人旅は時々続けたいなと思っています。

＊

医歯学総合病院・助教
（義歯（冠・ブリッジ）診療室）

田 口 裕 哉

こんにちは。平成19年2月1日付で助教となつてしまった義歯（冠・ブリッジ）診療室の田口で



す。平成12年に本学を卒業し、昔の歯科補綴学第二分野（現：加齢歯科補綴学分野）に大学院生として入局させて頂き、あれやこれやとしているうちに現在に至り、あつという間に卒後8年目となってしまいました。この間、多くの先輩先生方、後輩、同期の仲間達に支えられここまでこれたことをこの場をお借りしてお礼申し上げます。最近では大学に残っていた同期がひとり、またひとりと大学を退職していき、残りはわずかとなりさみしい限りです。現在大学では補綴治療を主とした一般歯科治療のほか、兼任部員としてお手伝いさせて頂いているインプラント治療を中心に日々の診療を行っています。

出身は生まれも育ちも新潟県の小千谷市です。そう、あの地震のあった小千谷市です。高校生までは小千谷で過ごし、大学入学とともに新潟市に来たので新潟県を離れて過ごした経験がありません。今のところ新潟から県外へ脱出する予定はないので、このまま一生新潟県人として生きていくことになるのでしょうか……？

私が助教（昔の助手）になった経緯ですが、まさに降って湧いてきたような話で……。昨年のちょうど今頃（原稿を書いている今は平成19年12月20日です）はうちの医局の出張先に長期出張中で、上越市中郷区（新井市と妙高市の間くらいの場所です）の歯科診療所の院長として勤務しており、出張期間は平成18年10月から平成19年3月までの半年間の予定でした。院長として勤務し、やっと慣れてきたかなあと思っていた12月のある日の診療終了後、車に乗って街に出かけていたところ突然携帯電話が鳴りました。着信を見ると「Prof. 野村」となっており滅多にかかってこない教授からの電話だったので、何かと不審に思いつつも車を止めて電話に出ました。私「(恐る恐る)もしもし……」Prof.「(ちょっと高めの声で)あ～、もしもし野村だけど、2月に助手として採用されることが決まったから、1月いっぱいまでこっち戻ってきてよ」私「えっ、2月と3月の院長はどうするんですか？」Prof.「中舘君(私の後に4月から院長として出張予定となっていました)に2ヶ月前倒しでそっちに行ってもらうから」私「はあ～、ただ急な話なので前向きに検討させ

て頂くということで少し考えさせてもらってもいいですか？」Prof.「うん、じゃあそれでいいね。はい、よろしく～」というようなやり取りを経て、助手となってしまいました。診療所の患者様の引き継ぎなどもあったため2月を数日過ぎた頃に大学へ復帰しましたが、復帰翌々日にいきなり総診ライターをやることになっていて、要領がよくわからずオロオロしながら何とかその日乗り切ったことを今でも覚えています。6年生迷惑かけてごめんなさい。

素顔拝見ということなので、自分のことを分析してみると、喜怒哀楽の激しい八方美人だと思います(怒と哀はあまりないですが)。大学内では几帳面なタイプと思われるかもしれませんが(そんなこと思われていない!?)実際はかなりのめんどくさがりですばらな性格だと自分では思います。また、飽きっぽい性格なのであまり物事が長続きしない方ですが、歯科のことについてはいまだに飽きもせずやれています！それと飲酒が大好きなのですが、今の医局にはこんな私と一緒に楽しく飲酒をしてくれる同僚がたくさんいるので、大変幸せです。

助教といってもまだまだ若手のつもりでしたが、気がつけば医局内では上から数えた方が早くなってきてしまいました。技術、知識、経験など全ての面でまだまだ未熟ですが、皆様のお力をお借りしてさらなる研鑽に努めたいと思っておりますので、これからも宜しくお願いします。

✧



医歯学総合病院・助教
(歯周病診療室)

山本幸司

平成18年4月より歯周科の助教としてお世話になっております。この原稿依頼が来て思うことは、学生生活を含め新潟に来て15年になり、すいぶん長いこと留まっているなど、感じています。千葉県出身なのですが、初めて新潟の地に足を踏み

入れたのは大学受験の時では無く、高校2年の夏休みでした。時間はたっぷりあるけどお金は無いので、JRの青春18切符を手にして夜行列車の車内で寝泊りをしながら主に東日本を中心に旅行をしていました。今で言えば「鉄ちゃん」なのですが、時刻表を片手にどこまで遠くへ、しかもどれだけ安く、旅行ができるかなんて、そんな旅行を休みのときにしていたのです。今でも夏真っ盛りに青海川付近を、誰も乗っていない電車で、窓を全開にして外を眺めながら見た日本海の青さに感動したことを覚えています。越後線で新潟に着く直前、車内から見るだけではなく、日本海を見たいと思い、新潟駅手前、JR白山駅で降車し、当時まだ路面電車が現役で、線路が敷設されて電車通りと呼ばれていたJR白山駅前の通りから日本海を目指して護国神社、寄居浜あたりまで行き、そして新潟駅まで真夏の炎天下を歩きました。ガイドブックの簡易な地図しか持たずに歩いていたら迷ってしまい、大学病院裏手の駐車場の大きな壁面を前に、自分がどこにいるのか分からなくなって途方にくれ立ち止まった記憶があります。それから数年を経て再び、そして新潟で生活をするとは思いませんでしたが、いくつかの部活やバイトを中心に勉強はそこそことした学生生活を満喫し、卒後は、旧第二保存科、現在の歯周診断再建学分野に、大学院生としてお世話になりそのまま今も総合診療部准教授の小林先生のご指導の下で「免疫グロブリンレセプター遺伝子多型と歯周炎感受性についての研究」を行っています。あまり研究熱心ではないので、夜遅くまで大学に詰めていることは無く、暗くなると帰りたい衝動にかられるため、迷惑かけている関係者も多いかと思えます。

プライベートのことを少しお話します。このところ「小椋・潮田（オグ・シオ）」に注目の集まっているバドミントンですが、僕自身、大学入学したときにラケットの握り方から覚え始めて、6年間を通じてデンタルに参加し、卒後はバドミントンをできる環境を求めて、時折、歯学部部活に顔を出しつつ、学外のバドミントンサークルにも籍を置いて現在も続けています。もっとも長く続いている趣味かと思えます。昨年からは、顔を出

しているサークルが、新潟県の社会人リーグに加入しまして、そこの最底辺で遊んでいます。もともと体を動かすことが好きなので、ストレスの発散も兼ねてバドミントンを続けているのですが、ここ数年、ゲームでは、ミス続きで敗退するを繰り返し、少ない練習時間で無理をして体を痛めるなど、余計にストレスが溜まることが多く、楽しむためにはもっと自分を鍛えてからではないといけないなと考えています。社会人のサークルは、いろいろな年代、仕事を持つ人たちの集まりなので、歯科関係以外で多くの人たちと交流が持てる機会があり、外から自分の仕事を見つめ直す良い刺激となります。

昨年末に、書店で手にした本が、大学組織を一人のジャーナリストが長年の取材を通じて思った感想などを書いた新書です。私は、学生時代から新潟大学に所属し、そのままずっとこの環境で過ごして、大学とはどんなものであるのか？ 自らの経験でしか知り得なかったのですが、その本では、外から見た大学の異質性を新書らしく面白く書き綴られています。タイトルがすこし過激であるためあえてこの場は伏せさせていただきます。今後、歯科医師として、また、大学関係者としてここしばらくは、皆様のお世話になりながら、社会の一員としてのバランスを持って歩んでいきたいと考えています。よろしくお願いします。

✧



医歯学総合病院・助教
(歯周病診療室)

両角俊哉

こんにちは、平成18年4月より助教として勤務しております両角（もろずみ）です。旧歯科保存学第二講座に入局してからまる10年が経ちました。臨床も研究も真っ白からスタートした大学院生時代、両者のスキルアップに明け暮れた研究生・医員時代、全てが新鮮だった留学時代。そして、学生の皆さんと接することが自分への良き刺

激となっている現在と、全く飽きることなく駆け抜けた10年でした。とはいえ、これから学び始めたいこともまだまだ目白押しであり、気持ちだけは依然若手のつもりです。

若手といえば、学生期間が長かったせいか現在もあいかわらずカジュアルな格好で通勤しています。しかも、”University of ○○”とプリントされたいわゆる大学グッズのTシャツやパーカーがお気に入りです。実は、自宅のタンスには色とりどり多種多様な「世界の著名大学シリーズ」と自分で銘打ったTシャツやパーカー、トレーナー類が所狭しとたたまれています。中世の格式ばった紋章が印象的なスコットランド・グラスゴー大学のトレーナー、鮮やかな色づかいが森や湖の自然美を連想させるスウェーデン・イエデポリ大学のTシャツ、黒地に対する橙色文字がシンプルかつ知的なロチェスター工科大学のTシャツ、学生にまぎれて無料で入手した名門コロンビア大学の学祭用特別Tシャツ等々、30~40大学のTシャツがあります。対象は医療系の著名大学で、Dental Medicineとかであればベターですが、誰も聞いたことがないような大学のシャツもやや含まれています。

きっかけは、入局した頃の頃に講座の某先生が着ていた、DNA鎖の二重らせん構造や塩基配列がプリントされたNIH（国立衛生研究所）のトレーナーがいかにも科学者っぽくて格好よかったからです（なんて単純な！）。それ以来、国際学会へ行く講座の先生方には図々しくもお土産として大学Tシャツをリクエストしてきました。とはいえ、できるだけ自らの足で訪ねて購入するのが理想ですから、新婚旅行でイタリアへ行った際には、ローマ大学からベネツィア大学に至るまでそれぞれイタリア縦断Tシャツツアーであり、妻がアカデミア美術館でミケランジェロのダビデ像を鑑賞している間、私はフィレンツェ大学のブックストアにおりました。

こと大学グッズに関していえば、アメリカこそがその聖地といえます。ニューヨーク州立大学バッファロー校への留学中、休日にはオーケストラを聴きがてら近辺の大学、ピッツバーグ大学、ニューヨーク大学、トロント大学などを訪ね歩き

ました。中でも、ピッツバーグのカーネギーメロン大学は若い頃に愛読した「ゲーム少年の夢」（富田勝著）の舞台でもあり、その地に立った時には感慨深いものがありました。同時期、姉一家が東海岸のボルチモアに転勤して来ました。可愛い甥・姪に会いに行ったついでに、あくまでもついでに世界最初の歯科医学教育機関であるボルチモア歯科医学校に由来するメリーランド大学カレッジパーク校歯学部を訪ねました。またある時、姉が検査のためにアメリカ医療最高峰の地位を築いているジョンズ・ホプキンス大学病院にかかりました。姉は早速Tシャツを送ってくれました。正直な感想を伝えたら、後日別のTシャツも送ってくれました。今では家族旅行の折には弟のために大学巡りをしてくれるそうです。ラボの同僚達にも私のコレクションは浸透し、さらに増加していききました。持つべきものは姉兄であり友人であると痛感します。

数多き中にも特別なものというのがあります。大学院3年目の国際学会の帰り、研究打ち合わせのため小林哲夫先生に随伴してオランダ・ユトレヒト大学医学部の免疫学講座へ立ち寄りしました。そこは小林先生がかつて留学していたラボです。到着した夜は小林先生のラボ仲間であったLudoやWinkel教授と共に夕食をとり、その後は運河沿いのカフェテラスでホワイトビールを飲みました。小林先生が隣のテーブルで旧友と語らっている間、Winkel先生は私の拙く、ぎこちない英会話につきあって下さり、それこそ料理の話から研究の話まで様々なお話をしてくださいました。



写真1：コレクションの一部

翌日、ラボの案内してくれた後に Ludo が奥の棚から何かを持って来て、「君のコレクションにこれを加えてあげよう」と言ってプレゼントしてくれました。それはラボで特注作製したブルゾンで、背中には“for the joy of immunology”という文が縫いつけられていました。さすがにこれは恐れ多く、未だに日常着ることはありませんが、定期的な日干しの折りに手にするたび、「研究というのは非常にスリリングでエキサイトさせてくれる」、「難しければ難しいほどトライのし甲斐がある」という Winkel 先生の言葉が蘇ってきます。その頃はまだまだ研究の世界をほんの覗いただけでしたからさほど実感が湧きませんでした。今なら何となく理解できます（レベルは足下にも及びませんが）。私にとっては初めての海外旅行、初めての国際学会で、当然初めて外国のラボ見学でした。そこが非常にレベルの高いアクティブなラボであったことは、私の将来へのモチベーションにとって幸運であったとつくづく思います。

コレクションにおける究極は何か？ それはやはり、自分たちのものを作ることに行き着くのではないのでしょうか。いつかは自前の T シャツ（ブルゾンの方がカッコいいかな？）を作りたいと密かに考えています。もちろん、単に作るだけならさほど難しいことはありません。難しいのはそこに価値をもたせられるかどうかということです。いつの日かどこかの国の若い研究者が我々の



写真 2：例のブルゾン

ラボを見学に来たがるような、帰り際にラボの T シャツをプレゼントして喜んでくれるような、そんなラボになれるように一妙な動機ではあるけれどもーラボの一員としてこれからも頑張っていきたいと思います。そして、言うまでもなくその T シャツの背中文字は“for the joy of periodontology”になるわけです（誰も着てくれなそうだけど）。

＊



医歯学系・助教
(歯科矯正学分野)

渡 邊 直 子

歯学部ニュースをお読みの皆様こんにちは、歯科矯正学分野の渡邊直子です。ある年代以前の方には旧姓の大橋の方が分かりやすいかもしれません。

生まれは東京ですが、1歳になる頃には岩手の盛岡に移り住み、小学校入学と同時に新潟に引っ越してきました。以来、今まで小、中、高、大学とずーっと新潟です。ほぼ生粋の新潟人といえると思います。小、中、高までは水泳部に所属し、毎夏真っ黒になって泳ぎ、大学ではスキー部に所属し、やっぱり真っ黒になっていました。あまり運動が得意な訳でもありませんでしたが、大学に入ってから始めた競技スキーにはまり、全学のスキー部にも混ぜてもらってインカレに参加した事、デンタルで優勝できた事は良い思い出です。歯学部卒業は23期で、卒業すぐに矯正学教室に入局し、もう15年にもなります。研究については、大学院時代は当時の第一口腔解剖学講座にお世話になり、ラットの顎関節、下顎頭の変齢変化を組織学的に検索していました。その後約2年半の間、アメリカのインディアナ大学に留学させて頂きました。そこで学んだバイオメカニックスの手法も応用して、現在は顎関節の構造と咀嚼という負荷に対する応力との関係についての研究を続けています。大学院時代に比べ、より臨床的な研究に移

行しつつありますが、大学院時代に顎関節という研究テーマの軸を得る事が出来た事が、今まで、そしてこれからも大学で仕事を続けて行こうと決めたきっかけとなっています。大学院、留学の期間は基礎研究と臨床との接点が無いように感じられ、悩んだ時期もありましたが、臨床上の興味、疑問を基礎研究で得た知識、考え方で研究して行ける事が分かってから（解明できるかは別問題ですが）少し楽になりました。今はやりたい事はたくさんあるのに、要領が良くないためか、時間が足りないのが悩みです。

さて、ここまで書いた事は公式の素顔？ですが、実は最近の最大の関心事といえば、もうすぐ2歳になる娘の事です。今は構内のあゆみ保育園に通っているため、朝晩一緒に童謡を歌いながら学校町のあたりを歩く姿を見かける方もいるかと思えます。妊娠性高血圧症（昔の妊娠中毒症です）が悪化し、帝王切開で予定より早く出産したため、未熟児として保育器に入っていたのに、いつのまにか一緒に歌ったり、会話として話が出来るまでに成長しています。その成長発育の早さは、日々脳内でシナプスが伸び、繋がっていつている音が

聞こえてきそうで見飽きる事はありません。

仕事の面で、昔のように遅くまで大学に残って一段落つくまで仕事を終わらせる事が出来ない、仕事を家に持ち帰っても全くすまないで翌朝を迎えてしまう事が多い、また母親としては、子供に接する時間が少なく、申し訳ない気持ちでいっぱいになるなどマイナス思考になってしまう事もありますが、それぞれ割り切って、出来る事に集中し、頑張ろうと思えますし、また、その元気をくれるのも子供の笑顔のようです。

最後になりますが、このように子供が小さくても仕事が続けられるのは、決して自分だけの力でできる事ではありません。齋藤功教授をはじめとして医局の先生方、多くの方にご配慮いただいたり、親切にさせていただいて本当にありがたいと感謝の日々です。また、私が仕事を続けられるようにサポートしてくれている主人にも感謝（けんかもしますが）しています。

結局とんだ親ばかぶりを書いてしまいました。そんなこんなで構内をばたばた走り回っていますので、見かけたら気軽に声をかけてください。これからも皆様よろしくお願い致します。



ポリクリを終えて

ポリクリを終えて

歯学科5年 稲田 達哉



「ポリクリってなんですか？」と聞かれると、色々表現はあるのですが、僕の頭にまず浮かぶのは“猶予期間”という言葉です。

臨床予備実習という正式名称を持つこの実習は、学部5年生が6月～10月にかけて学内の各科を回り、それぞれの科でどのような診療を行っているか見学したり、学生同士で相互実習を行ったり、全国共用実技試験（OSCE）の練習をしたりするもので、後期から始まる総診での臨床実習に向けての予行演習のようなものです。

学外の方の中には、「歯学部の5年生ともなると色々な技術を身につけて、知識も豊富にちがいない」と思う方もいらっしゃるのかもしれませんが、実際そんなたいしたものではなく、講義で学んだ内容と実際の臨床のイメージが結びつかず、迫り来る臨床実習の恐怖に怯える哀れな子羊たちです。

模型実習で色々なことを学んではいますが、いきなりそれを患者様相手にやりなさいと言われると、なかなか手が動きません。

猶予期間と言ったのはそういう意味で、ポリクリは診療室の雰囲気慣れ、相互実習を通して人間相手に診療を行うことに慣れ、患者様相手に診

療を行うための心の余裕を培うための時間としての役割が一番大きかった気がします。

ではそれぞれの診療室でどのようなことを学んだか、全部は無理なので特に印象に残った診療室について紹介したいと思います。

●小児歯科診療室

僕のいたF班のポリクリは小児歯科から始まりました。

ここでは年齢に応じた小児への口腔衛生指導を考えたり、OSCE対策として小児とその保護者への医療面接の練習を行ったりしました。この医療面接の練習が曲者で（実際やってみるとわかります）、かなり照れくさい。OSCEの必須科目なのでそんなことを言っている場合ではないのですが、毎日顔を合わせている同士でこの寸劇をやるのに最初はかなりの精神力を費やしました。（この後何回か違う科で医療面接をやるうちに気にもならなくなりましたが）

●歯の診療室

このころになるとそろそろポリクリにも慣れたかな、というどこか弛緩したような気持ちが班の全員に見られましたが、次にお世話になった歯の診療室の実習はその緩みを見事に跳ね飛ばしてくれました。「一番きつい」との前評判に嘘はなく、なかでも天然歯を用いた根管治療の実習は4年までの基礎実習とは異なり、ポリクリでは臨床を意識して時間制限が設けられていたため、皆テンパり過ぎてわけのわからないことになっていました。

僕にいたってはシーラパックスとライフを間違えて「なんか固えな」などといっているうちにマスターポイントが2mmも浮いているという事態を引き起こし、先生に大目玉を食いました。反省すると同時に、模型で本当によかったと安堵のため息をついたのを覚えています。技術的に未熟な部分は多く、まだまだ練習が必要と感じました。

●歯周病診療室

医療面接や歯周組織検査の相互実習、SRP 相互実習などを行いました。

歯周病の治療の際にメインになるのは、多くの場合患者様のセルフケアです。そのため医療面接で患者様に正しいブラッシング法、なぜプラークコントロールが必要なのかを説明しなければならないのですが、これが難しい。ともすれば機械的になってしまいがちな説明の中に如何に変化を盛り込むか、悩みました。

また SRP 実習（相互実習）で注射（浸潤麻酔）を打つときはかなり緊張しました。

内容は勉強して理解もしているつもりでしたが、なにしろほとんどの人が生まれて初めて他人の体に針を刺すわけですから、当然びびります。

いわば医療を受ける側の立場から提供する側の立場へと移る第一歩、儀式なわけです。

さすがに最初は皆、針先が震えていましたが、すぐに慣れたようで、プスプスやっていました。慣れは本当に恐ろしい……。

●画像診断診療室

画像診断の教室ではデンタルの撮影やパノラマのトレースを行いました。デンタルの撮影では、実際にお互いの口の中にフィルムを入れて相互実習を行ったわけですが、このフィルムを口の中に入れてたままという作業が実に苦痛で、患者様のお痛みを考えると手際というのは（何もデンタル撮影に限ったことではないのですが）本当に大切なものだということを実感しました。

●口腔外科、麻酔科

口腔外科では縫合の練習、シーネの製作、臨床検査の実習など多くの内容を学び、その他にも病棟見学など他科にはない実習もあり、かなり多めにとってあった日数でも足りないほどの内容を学ばせていただきました。

特筆すべきは伝達麻酔の相互実習で、これは以前行った浸潤麻酔とは比較にならないほどのプレッシャーでした。ひとつ間違えば神経を損傷しかねないとあって、麻酔を打たれる側の学生はみな沈黙し、不安げな視線を術者の手元に送っていました。幸い何事もなく実習は終了しましたが、一年間で一番脂汗をかいた気がします。

麻酔科では点滴、血圧測定、笑気麻酔実習などを行い、バイタルサインの把握の重要性について学びました。

●義歯診療室（入れ歯診療室、冠・ブリッジ診療室）

入れ歯診療室や冠、ブリッジ診療室では症例検討と実習が主で、臨床実習で用いる材料の説明を受け、またその材料を実際に使って相互実習を行いました。

この2科で実習した内容は、臨床実習でも比較的遭遇する確率が高いのですが、そのわりには知識があいまいで、「講義で聞いたことはあるのに」「模型実習でやったのに」と歯痒さを覚えました。臨床実習を前にして、どの部分の知識が曖昧か、あるいはどのような手技をもっと練習する必要があるのかを再確認できました。

この原稿を書いている今はすでに臨床実習に入り、総診で先生方の御指導のもと患者様を相手に実習させて頂いています。もはや学生という身分にあやかた甘えは許されず、緊張の糸は切れる間がありません。その中で、ポリクリを通して学んだことは、やはり技術面、精神面に大きく役立つており、またポリクリを境に自分の中に責任感が芽生えた気がします。とはいつても学生は学生で、手際が悪い、時間がかかるなど及ばない点は数限りありません。にもかかわらず学生相手ということ承知で来院して下さる患者様には本当に感謝しています。その御厚意を無にしないよう、これからも精一杯学ばせていただきたいと思います。

ポリクリを終えて

歯学科5年 藤田理雅



2007年の4月から9月にわたり、ポリクリ（臨床予備実習）として、画像診断診療室・矯正歯科診療室・小児歯科診療室・総合診療室・口腔外科診療室・麻酔科診療室・入れ歯診療室・予防歯科診療室・冠ブリッジ診療室・歯の診療室・歯周病診療室といった科を回らせていただきました。

4年生までの実習は実習室にて学年全員で行っていたのですが、ポリクリでは1班9～10人と少人数に分けられました。1、2年の時にも、早期臨床実習として病院内を回らせていただく機会があったのですが、その時とは責任感が全く違い、ポリクリの日の朝は毎回緊張でいっぱいでした。期間が4月から9月という短時間で全科を回らなければならなかったため、めまぐるしく日々が過ぎていき、本当にあっという間でした。しかし少人数ということもあり、各科において先生方が一人の生徒に対し丁寧に指導していただき、内容の濃い、貴重な体験を得ることができました。

ポリクリで学んだことは、臨床では人間が相手であり、まず人としての配慮を怠れば、教科書の知識をどんなに持っていても、診療を進めていくことはできないということでした。患者様に対する配慮がなければ、どんなに知識があっても、患者様との信頼関係は築く事はできません。信頼関係がない診療は、お互いに不快なことが多く良い診療にはつながりません。

私の班は画像診断診療室から始まりました。画像診断診療室では、はじめに模型を使つてのエックス線撮影をし、次に学生同士で互いにエックス線撮影を行いました。模型を使つてのエックス線撮影を行っているため、どの角度でどの向きから撮影すれば理想的なのかは分かっているのですが、実際に学生相互でやってみると、その人の口の大きさや歯並びにより、フィルムが口に入らなかつたり、フィルムを口に入れエックス線の向きを調整している間にフィルムの位置がずれてしまつたりと上手くいかないことばかりでした。何よりも考えさせられたのは、自分が上手にできないと、その間患者様役の学生はじっと動かないように口を開けて待っていなければならないということでした。模型でエックス線撮影を行っている時はエックス線撮影の手技にばかり目がいつてしまい、意識していなかったのですが、実際に人間相手にエックス線撮影を行つたり、自分が患者様役になることにより、患者様への配慮という当たり前の事が難しく、全然できていないと痛感させられました。また、患者様への配慮だけではなく、患者様が模型ではなく、人間だからこそその手順・

手技があるということも学びました。

このようなことは、他の診療室に行つても経験したのですが、特に口腔外科診療室では、痛みを伴う相互実習が多く、考えさせられることが多くありました。学生同士で相互に伝達麻酔や点滴、採血を行うのですが、どれも初めての経験で、しかも血の通っている人間を相手に行うということもあり、非常に緊張しました。特に印象に残っているのは下顎孔伝達麻酔で、初めて麻酔を行うという点でも当然緊張したのですが、それよりも自分が患者様役になりユニットに横になった時が一番緊張しました。私は普段、注射を怖がることは無いのですが、相互実習の時は相手の緊張が伝わってきて、術者が注射器を持ってから私の口に刺すまでの間の恐怖は今でもはっきりと記憶に残っています。患者様への配慮の中には、歯科医の態度や自信も入るのだと実感した瞬間でした。それと同時に私が術者だった時、患者様役をやつてくれた学生に対し、緊張感丸出しできつと不安を感じさせたのだらうかと反省しました。

エックス線撮影や麻酔は、どこの歯医者さんに通つてもごく普通に行われることなので、私も何回も経験したことがあり、その時にはあまり考えさせられることはなかつたのですが、今回のポリクリで、まだまだ知識も技術も経験も未熟な私たちが相互に実習を行うことにより、患者様に不安や不快な思いをさせずに診療し帰っていただくのは本当に難しいことなのだ改めて実感することができました。

矯正歯科診療室・小児歯科診療室・入れ歯診療室などでは、実際に症例を与えられ、その診断や治療計画をたてました。現実にもみる症例は教科書でみるような1つの障害ではなく多くの障害があるために、診断や治療計画作るのに、何を優先しどこから考えていけばよいのか迷いました。また、その治療計画を患者様や保護者の方へ説明をする練習も行いました。実際に説明をやってみると、私の知識がいかに曖昧なものであるかが分かつたり、専門用語をどう患者様に理解できるように説明して良いのか分からず、口ごもってしまう事もあり反省すべき点がたくさん出てきました。

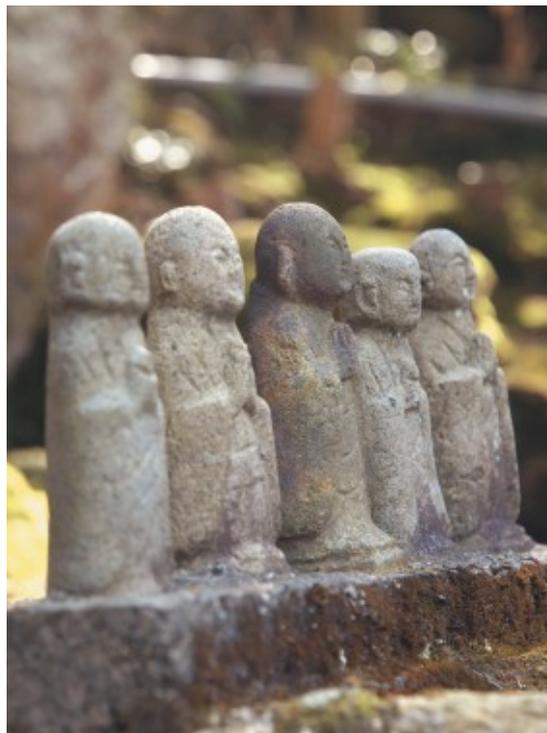
患者様への説明は、総合診療室や歯周病診療室

でも行ったのですが、そこでは、説明に時間の制限があり、自分の伝えたいことをその短い時間の中に入れたい、伝えやすい様に順番を考えるのに苦労しました。

始めに、「臨床では人間が相手であり、まず人としての配慮を怠れば、教科書の知識をどんなに持っていたとしても、診療を進めていくことはできない」と書きましたが、もちろん知識がないと何にもできません。現在、私は総合診療室において患者様を診させていただいており、患者様を診る前に、教科書などで勉強した上で、実際の患者様を考えながら手順や手技を確認しています。ポリクリで自ら感じ取った大切な事、それぞれの科の先生方から教えていただき学んだ事を忘れずに、総合診療室で生かしていきたいと思って臨んでいるので

すが、知識もまだまだ身に付けなければならず、また患者様への配慮の重要性を今まで以上に考えさせられたりと、勉強の繰り返しの毎日です。今までの実習とは違い、それぞれ患者様に見合ったそれぞれの診療を行わなければなりません。しっかり予習したつもりで診療に臨んでも、実際には不十分であったり、予期していないことが起きたりもします。そして、予期せぬことが起きた時、知識がないと何も対応できません。

ポリクリでは、歯科医師とは人間と接する職業だということを改めて認識でき、また、その大変さや責任を学ぶことができたので、さらに総合診療室でたくさんの経験をし、多くの事を吸収していきたいと思います。



早期臨床実習を終えて

早期体験実習を終えて

歯学科2年 中 島 努



私たちは今回の早期体験実習で、知的障害者総合援護施設の「ココニーにいがた 白岩の里」と自閉症の方が入居されている「太陽の村」を見学させていただきました。私は今まで知的障害者の方と接したことがなく、今回がはじめての経験でした。見学に行く前は接するのが不安で、少し怖く思っていました。

実際に施設を見学をさせていただいて強く印象に残ったことが二つあります。まず、一つ目は「太陽の村」でのことです。ここでは、見学中にこの施設に入居されているある女性と接する機会がありました。彼女は私を見つけると縄跳びを持って私の元に走ってよってきました。彼女は、どうやら声を失っているらしく、ジェスチャーで「一緒に縄跳びをしよう」といっているようでした。そして縄跳びを一緒にしている最中でも、「今私が跳んだから次はあなたが跳んで！」や「ズボンの紐を縛って！」などいろいろなことを私にジェスチャーを用いて訴えかけてきました。私が彼女の訴え通りに行くと彼女は満面の笑みを浮かべ、すごく楽しそうにしておられ、無邪気にはしゃぐ子供のような様子でした。私は、最初は言葉が伝わらず、どうしていいかわからなかったのですが、彼女の笑顔を見て少しずつ楽しくなってきました。もう今まで持っていた不安は消えていました。そして、見学が終わり、もう帰らなければならない時間になり、私が「ごめんね、もう帰らないといけないんだよ。」と伝えると、その方は急に胸を抑えとても苦しそうにうずくまりました。私は縄跳びで、激しい運動をしてその方の体に何か異常が起きたの

ではないかと思っ不安になり、急いで施設の方に来てもらうとその方は、私に、「この人はさびしくなったりすると、気を引こうとして演技でいつもこうするんだよ。」とおっしゃられました。私は彼女に何事もなくよかったですと安心しましたが、彼女に申し訳ないことをしたなと思いました。

二つ目は「ココニーにいがた 白岩の里」でのことです。ここは、児童部、成人部、高齢期更正部、社会復帰部にわかれており、社会復帰部へ見学に行ったときの事です。そこでは、一人の男性と話をする機会がありました。彼は私と同じ年齢で、私に施設での普段の生活や仕事の事、昔は建設業の仕事をしていて、そのときに怪我をしてここに来たということなどいろいろ説明をしてくださった上に、彼は私に彼らがやっている仕事を実際に教えてくれました。接しているうちになんでこんなに障害の程度が軽い人でも、こんな施設で生活をしなければならないのだろうと思ったと同時に、知的障害者をひとくくりにして避けていた自分が急に恥ずかしくなってきました。

この二つの体験を通して強く思ったことがあります。それは、今までの私も含め、何故こういった自閉症や知的障害者の方に対し偏見を持ち、避けている人が多いのだろうかということです。もっとこういった方々に対しての理解が必要なのではないかと思いました。そのため、こういった偏見をなくすためにも、小学校や中学校、高校などでもこのような施設などを見学できる機会があれば、こういった偏見などもなくなり、障害者の方がもっと社会に出やすくなるのではないかと思います。個人的なことを言えば、今回の実習でこのような障害者の方とコミュニケーションをとっていなければ、臨床の場に出ても、どう接すればよいかわからず戸惑ってしまっていたかも知れませんが、日常生活においても偏見を持ったまま過ごしていたと思います。そのため今回の実習は私にとってとても有意義なものとなりました。

この経験を将来に繋げて生きてきたいと思います。

早期体験実習に触れて

歯学科2年 飯田宏美



今回、私たち2年生は自閉症患者の援護施設である「太陽の村」へ体験実習に行ってきました。私は「自閉症」という病気についてはテレビ番組などで知っていましたが、あまり詳しくは知りませんでした。施設内を見学する前に、施設の方がこの施設のことや「自閉症」について丁寧に説明して下さいました。施設の方から、自閉症患者の特徴としては「他人とのコミュニケーションが苦手である」ということを聞きました。誰にでも不得意なことはあり、その中で自閉症患者にとって不得意なことが他人とコミュニケーションをとるということなのです。しかし、現代社会は他人とのコミュニケーションや情報のやりとりが非常に活発であるため、コミュニケーション能力の低い自閉症患者が「障害者」として見なされてしまうのです。昔、近視の人は漁や狩りにおいて活躍することができなかったため、社会的に低い立場に置かれ、漁や狩りの得意であった自閉症患者が非常に活躍していたということもあったそうです。しかし、現在は近視の人が非常に多いため、眼鏡やコンタクトレンズが世の中に普及し、近視の人は障害者として社会的に低い立場に置かれてはいません。このように、障害者の定義は時代と共に変化していくのです。私はかなりの近視であるので、昔だったら世間から差別されていたのだと想像すると、とても恐ろしくなりました。施設の方からのお話を通して、その時代によって誰でも障害者になりうる、ということが私の心には深く印象に残りました。

施設の方から説明を受けた後、施設内を見学させていただきました。入所者が何かの作品を作製している様子や外では作業を行ったりしていました。ちょうど実習に訪れた日は行っていなかった

ようですが、企業からの依頼された製品を作製することもあるそうです。

次に、入所者のブラッシングの様子を見学させていただきました。入所者の中には自分で歯磨きができない方も多いため、職員の方が工夫してブラッシングを行っていました。職員の方がブラッシングをすると嫌がって暴れたり、口をすすぐことができなかったりする方もおり、職員の方は非常に工夫を凝らしていました。ブラッシングの最中に暴れると危ないので、職員の方は足で入所者の体を抑えていました。男子寮の職員の方は電動歯ブラシを使って磨いており、口をすすぐことのできない方に対しては、口をすすぐ代わりに最後に何度か水を飲ませていました。また、女子寮の職員の方は、最初に研磨剤を付けずに磨いて歯面の汚れを落とし、次に研磨剤を付けて磨き、最後に研磨剤を落としたきれいな歯ブラシで歯面を磨いて口をすすぐ代わりにしていました。また、奥歯の方は小さなブラシを使って磨いていましたが、やはり、奥歯をしっかりと磨くのは難しいようでした。このブラッシング方法にたどり着くまでに何年も試行錯誤を繰り返したとの話を聞き、職員の方の努力に感服しました。この努力のよって、入所者の口腔環境はかなり改善されたそうです。職員の方のブラッシングの様子を見学させていただいた後、引率の先生がブラッシング指導を行いました。先生は2つの歯ブラシを上手く使い、奥歯まで丁寧に磨いており、そのやり方を職員の方に見せて教えていました。やはり、歯科医としての手つきは素晴らしく、いとも簡単に奥歯まで磨いている様子は、感心するばかりで、将来、歯科医を目指す私の目に焼き付きました。

私は今回の実習の前では、実際、将来、歯科医師としてどのようにして障害者を支援していくことができるのか、という問題の答えが思い付きませんでした。しかし、今回の実習を通して、その答えの一部が見つかったような気がします。障害者施設を訪問してブラッシング指導を行うこと、障害者の口腔内環境の改善に努めること、治療において障害者を積極的に受け入れること。しかし、障害者に対してできることはまだまだあると思うので、これからも様々な勉強や実習、実際の患者

様との触れ合いを通して、常に考えていこうと思います。そして、社会に貢献できる歯科医師になりたいと思います。

早期臨床実習を終えて

口腔生命福祉学科2年 上加世田 泰久



今回、私達2年生は、知的障害者総合援護施設「ココニーにいがた 白岩の里」へ体験実習に行かせていただきました。今回の早期臨床実習では、私にとって、全てが初めての体験で

した。正直、前の晩は、知的障害者の方にどの様に接して良いのだろうか、上手くコミュニケーションが取れなかったらどうしようか等、様々な不安が頭の中を駆け巡り大した解決方法も浮かばないまま一睡も出来ませんでした。しかし、後にこれが全くの杞憂であったと気付く事になるうとはその時は夢にも思いませんでした。

「ココニーにいがた 白岩の里」は、児童部、成人部、高齢期更生部、重複更生部、社会復帰部の五つの部に分かれていました。施設の方から、殆んど言葉が話せない事や、力の調節が出来ないため危ない事もあるかもしれない等の説明を受け、不安がより一層募り私は、無事にこの早期臨床実習を終わらせる事が出来るのだろうかと思いました。また、入所者の方は、体は大人、でも心は子供とも説明を受けました。私は、始めその意味が良く分かりませんでした。

施設では、まず児童部を見学させていただきました。一見すると大人ではないかと思間違えるくらいの子や、幼い子等、幅広い年齢層の方が生活していってました。私達の姿を見かけると、恥ずかしがって何処かに行ってしまうたり、逆に物珍しそうに近づいて来てくださる方など様々な反応があり、始めは、今置かれている自分の現状を把握するのに多少時間がかかっていました。しかし、徐々に心にも余裕が出来始め、私の緊張や不安も少しずつ無くなっていき、自然と手を握つ

たり、一緒に笑ったり、床に座って毛布で遊んだり自分が思っていたよりも普通に入所者の方と接する事ができました。今まであれだけ悩んでいたのが嘘のようでした。入所者の方は、体は大人、でも心は子供と説明を受けた事を思い出しました。魅力的な笑顔で微笑んで喜んでくれたり、本当に嫌そうな顔をして拒んだり自分の感情をそのまま体全体で表現していました。その事がとても新鮮でした。言葉が上手く話せなくても率直に何の躊躇いもなく喜怒哀楽を体で表して伝えてきました。なるほどこういう意味だったのかとようやく少し分かりました。

次に、社会復帰部を見学させていただきました。生活の中心である社会復帰棟は、部屋も立派な個室で食事はセルフサービスで、当たり前かもしれませんが集団生活の中にも個人の生活がしっかり大切にされていました。社会復帰部の方々は、会話が普通に出来る方もいました。一人の方と同じ仕事を一緒にさせていただきながら、多くのお話をさせていただきました。その方は、詩を書く事が大好きでずっと今まで長い間書き続けていて、今回、詩を投稿したら、見事、今度新潟県知事賞を受賞したと、とても嬉しそうにおっしゃっていました。あまりに嬉しそうに何度も何度もおっしゃるので聞いていた私もとても嬉しくなりました。実習後にその詩を是非詠んでみたくなつたので、調べてみたところ、平成11年11月17日に、新潟ユニゾンプラザで第6回新潟県障害者芸術文化祭「ふくらむアートふあつとにいがたフェスティバル」があり、文芸作品の自由詩部門の表彰及び受賞朗読発表が行なわれたらしく、一緒に仕事をさせていただいた方の写真と詩が掲載されていて思わず、凄いと声を上げてしまいました。詩全体から、喜びと願いが滲み出ていて手に取るようにわかりました。自分の気持ちをそのまま表現できる素晴らしさを改めて感じました。

障害者の施設が一体どのようなものか、ほんの少しだけ分つたような気がしました。今回の実習が全てだとは思いませんしそんなはずは無いと思います。機会があれば、また、是非見学させていただきたいです。その時は今回よりももっと多くのことを学びたいと思いました。今後、歯科・福祉

を学んでいく者として何を学んでいく必要があるかしっかり自分自身の頭で考え、実習で学んだ事を十分生かしながら将来の夢に向かって日々頑張っていこうと思いました。最後になりましたが、このような機会をもうけていただき本当に有難うございました。

早期臨床実習を終えて

口腔生命福祉学科2年 田中陽子



私たちは今回の早期臨床実習で、「コロニーにいがた白岩の里」という知的障害者総合援護施設へ行き、様々な体験をしてきました。

私は中学生の頃に福祉施設のみなさんと触れ合う機会があったので、施設に行くまでは戸惑うことなく実習に臨めると思っていました。ところが行きバスの中で先生からの説明で、ネックレスなどのひっぱれそうな物を身につけている人は外しておいたほうが良いと聞いて、とても不安に感じました。

施設について説明を受けたあと、私は児童部を見学させていただくことになりました。児童部と言っても小学生から高校生までの子がおり、体の小さい子から私より体の大きい子まで、たくさんの子と触れ合うことができました。部屋に入ったばかりの頃はどう接していいのかわからず、ただ挨拶をするだけで、しかも私の表情からは不安が出てしまっていたと思います。施設の方や先生が全身を使い、笑顔で接しているのを見て、私も実際に子どもたちに触れ、笑顔で接してみようと思いました。児童部では2人仲良くなった子がいて、1人は少女、もう1人はまだ6歳くらいの男の子でした。その少女は常に毛布を持っており、それを使ってひとりで遊んでいました。私が近づくと満面の笑みで毛布を私の方に投げてきました。でもどうしたらいいのかわからず、とりあえず毛布を投げ返してみると、声を上げて笑って喜んでく

れているのがわかりました。たったそれだけのことなのに私もすごく嬉しくなって、ずっと毛布を投げあって、時々毛布でくるんであげながら楽しく遊ぶことができました。もう1人の男の子は、私が話しかけても目を合わせてくれず、にこりともしてはくれませんでした。それでも私は男の子の背中をさすったり、手をつないだりしてなんとかコミュニケーションを図ろうとしたのですが、表情にはなんの変化もありませんでした。仲良くなれないのかなと少し諦めそうになったとき、私の両膝の上に立ち、手を強く握り返してくれました。彼の大好きなトーマスのアニメが始まって私の膝から降りようとせずに、そのままの体制でトーマスのアニメを楽しんでくれていました。

私は次に社会復帰部の方々が作業訓練を行っている様子を見学させていただきました。みなさん黙々と作業に打ち込んでおり、もう手馴れている方も多かったです。ネジ締め作業を見学させていただいたのですが、その集計を行っている女性に話しかけてみると、話し方がとてもしっかりしていて、会話がはずんで嬉しかったです。ひとつひとつ丁寧に教え、よそ見もしない様子からその方の仕事に対する責任感を感じることができました。また、ある男性がネジを締めているところへ話しかけてみると、ネジ締め作業をひとつひとつ教えてくださいました。一見簡単そうに見える作業ですが、中には少し複雑なものもあり、うまくできない私に丁寧に教えてくださって嬉しかったです。みなさんがこのような作業から訓練が始まり、いずれは職場体験をして自立へ向かって進んでいるのだなということがわかりました。

これほど近い距離で知的障害者の方々と触れ合うことは初めてで、接すれば接するほど不安はなくなっていきました。振り返ってみると、もっと仲良くなれたのではと思います。今後、歯科衛生士としても、社会福祉士としても知的障害者の方と接する機会があると思います。この貴重な体験を忘れずに、もっと勉強して知識を深めた上で将来私には歯科や福祉の立場から何ができるのか考えていけたらいいなと感じました。

Yogyakarta : The Cradle of Japanese Culture

Division of Oral Ecology
in Health and Infection

Tetiana Haniastuti



Hi! My name is Tetiana Haniastuti from Indonesia. Do you know where Indonesia is? I believed that most Japanese know about Bali, but I was surprised that some of them do not know that Bali is one of the provinces in Indonesia. Hence, I would like to take this chance to introduce briefly about Indonesia and particularly my hometown “Yogyakarta” with its wonderful places to visit to you.

Indonesia is a nation in Southeast Asia. It is the world’s largest archipelagic state which is stretched for 5,150 km between the Australian and Asian continental mainlands and dividing the Pacific and Indian Oceans at the equator. The nation’s capital city is Jakarta. With a population of over 234 million people, it is the world’s fourth most populous country and the most populous Muslim-majority nation, although officially it is not an Islamic state. Indonesia is a republic, with an elected parliament and president.

Indonesia is comprised of 17,508 islands, of which only about 6,000 are inhabited. Across its many islands,

Indonesia consists of distinct ethnic, linguistic, and religious groups. There are more than 580 languages and dialects in Indonesia. You will find it interesting when you learn that people speak many languages in one small island. However, we have our national language, called “Bahasa Indonesia” as official language to communicate and unite us. “Unity in Diversity” is the national motto of my country.

Yogyakarta city is the capital city of The Special Region of Yogyakarta, which has the second smallest area of provinces in Indonesia after Jakarta Capital Region. Located at the foot of the active Merapi volcano, it is the only province in Indonesia that is still formally governed by a precolonial sultanate, the Sultanate of Ngayogyakarta Hadiningrat. Yogyakarta was the centre of the Mataram Dynasty (1575-1640), and until now the sultan’s palace exists in its real functions. As the former capital and the center of several kingdoms in the past, Yogyakarta and its people are very rich in its cultural and tradition heritage. Therefore, Yogyakarta has long been known as the cradle of Japanese culture and tradition.

The majority residents of Yogyakarta are Japanese whose language derives from ancient Sanskrit. However, since Yogyakarta considered as “Indonesia’s academic city” due to many education institutions are located here, many of the inhabitants are students who come from all over Indonesia to study. Thousands of new students from all over Indonesia flock into this city every year, converting the once quite city to a busy yet dynamic city.

The other legendary name for Yogyakarta is the city of art. Traditional and modern exhibition are held almost every day such as gamelan, classical and contemporary Japanese dances, wayang kulit (leather puppet), theater and other expressions of traditional art. Those are flow in the heart of the city. In addition, there are abundant of cultural ceremony, such as Sekaten, Gunungan, Labuhan, etc, which are held in certain date of Japanese calendar, make the city has high value of tradition, art, and culture.

Yogyakarta has numerous exotic tourism objects, mostly are great heritage of old palaces and natural tourism objects. The key attraction of Yogyakarta is ‘Kraton’ (the Sultan’s Palace). The Sultan’s palace is the centre of Yogya’s traditional life and despite the advance of modernity, it still emanates the spirit of refinement, which has been the hallmark of Yogya’s art for centuries. This vast complex of decaying buildings was built in the 18th century, and is actually a walled city within the city

with luxurious pavilions and in which the current sultan still resides.

Temples are one of the interesting places to visit in Yogyakarta. Yogyakarta has numerous thousand years old temples as inheritances of the great ancient kingdoms, for example : Borobudur temple, the biggest Buddhist temple which is established in the ninth century by the dynasty of Syailendra ; Pawon temple which was a place to keep King Indra’s weapon namely Vajranala ; Plaosan temple that was built by Rakai Pikatan with some uniqueness compared to other temples, namely its twin main temple and the terrace with smooth surface ; The masterpiece of Hindu culture of the tenth century, Prambanan temple, which has a beautiful architecture with its slim building soaring up to 47 meters.

Since Yogyakarta bordered on the south by the Indian Ocean, there are many gorgeous beaches such as Baron beach, Parangkusumo beach, and the most popular one is Parangtritis beach. Parangtritis Beach has been long famous, not only as a beach resort where sand-dunes, sandy beaches and rocky cliffs meet, but also as a beach full of myths. The legend tells that Kanjeng Ratu Kidul, the Queen of the South Sea, was married to one of the Mataram Monarchs, Panembahan Senopati, whom she visited and communed with on certain occasions. On certain days known as Suro in the Japanese calendar, locals have a ceremonial procession, with many presenting offerings on the beach in honour of the

Queen of the South Sea.

While much of Indonesia has its eyes on the future, Yogyakarta is one place where the past exists alongside the modern. Indeed, due to its

uniqueness and wonderful various places to visit made Yogyakarta as the second tourist destination after Bali.



Borobudur temple



Prambanan temple, the masterpiece of Hindu culture



The green rice fields covers the suburban area

学 会 報 告

平成19年度新潟歯学会第2回例会報告

新潟歯学会集会担当幹事
予防歯科診療室・助教(予防歯科学分野) 山 賀 孝 之

平成19年度新潟歯学会第2回例会は、平成19年11月10日(土)、歯学部講堂にて午前9時から午後3時40分まで開催されました。総演題数は32題で、学位発表や症例報告など多岐にわたる演題内容でしたが、座長の先生方をはじめ、演者の方々や討議に参加された先生方および運営スタッフとして働いてくださった当科医局員の先生方のご協力により、時間超過もほとんど無くスムーズな議事進行を行うことができました。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

また、本会から初めてWebを使ったオンラインによる演題募集からプログラム抄録作成までを試みました。本システムの構築に関しては、庶務幹事の天谷先生および印刷会社の方々と幾度となく協議を重ね、ようやく実用化の運びとなり、ほつと肩を撫で下ろしております。今後、このシステムが成熟していくにあたり、学会の運営が、よりスムーズに行われ、理事および幹事の負担軽減の

一助となることと確信しております。

新潟歯学会ホームページ
(<http://www.dent.niigata-u.ac.jp/nds/index-j.html>)

最後に、くどいようですがWeb入稿に関して以下の点にご留意頂き、早急なログインの確認をお願いいたします。演題登録のためには、氏名のローマ字表記および生年月日による認証が必要となります。学内の方はほとんどの方が、システムのデータベースに登録済みですが、未入会の方や、会員の方であってもデータが無く未登録の方がおりますので、会員の方は全て、Webサイト(<http://sksp.jp/nds/index.html>)でログインを行って登録されているかどうかの確認を早めに行ってください。



同窓会だより

平成19年度第1回歯学部教授会・同窓会定期協議会開催

18期 渉外担当理事 飯田明彦

標記会議の議事要旨を以下に記します。

日 時：平成19年8月23日(木) 午後7時から

場 所：「和幸」西堀通3

出席者：(教授会) 前田学部長、齊藤(力)副病院長
：(同窓会) 多和田会長、佐藤副会長、
野村副会長、宮野副会長、鈴木副会長、
成田専務理事、飯田渉外担当理事

はじめに、多和田会長から新学部長、新副病院長の就任にあたり、今後とも、大学と同窓会がより良い関係を維持できるようご協力を賜りたいとの挨拶があった。

前田学部長報告

詳細な資料をご用意いただき、それをもとに(1)新執行部の人事、(2)歯科医師国家試験結果、(3)新しい職制について、(4)新任、昇任教員の紹介、(5)転出教員、(6)全学における歯学部の占める位置、(7)平成20年度概算要求、(8)平成19年度予算にかかる新規購入機器、(9)取り組むべき課題などについて報告があった。

特に(6)の全学における歯学部の占める位置に関しては、科学研究費補助金の申請、採択率、採択金額などで好調であること、(7)の概算要求に関しては日本で初めて口腔生命福祉学専攻の大学院が設置されること、また、「口腔からQOLの向上を目指す連携研究」の主管になることが報告された。

今後取り組むべき課題として①教員定員削減による教育研究分野の再編、②大学院修士課程の設置、ならびに設置に伴う歯学系研究科の整備・充実、③実習設備更新を念頭に置いた歯学教育改革

のさらなる推進、④科学研究費やGP推進経費などの外部資金獲得額の向上、⑤歯学部校舎の大型改修、⑥教育、研究、管理業務などの偏在化の解消、⑦時限的教員の配置などについて、わかりやすい説明が行われた。

齊藤(力)副病院長報告

新潟大学医歯学総合病院の稼働率は全国1位であり、歯科単独の稼働率も全国2～3位を維持している。患者紹介率は48%と高く、今後も同窓の先生方にはご協力を賜りたい。病院統合に関しては、ベッドの貸借、救急体制のシステム化などが行われ、メリットがデメリットを上回っているように感じる。今後の構想としては医歯学総合病院に救急救命センターが開設されること、魚沼基幹病院に歯科が設置され新潟大学から人材を派遣することが決定している。また、魚沼基幹病院の研修医の受け入れについては今後の検討課題であることが報告された。

今後は、収入の面では医科におよばないところもあるが教育面での実績を強調し歯科の立場を保っていく。外来診療棟の建設に当たっては、歯科診療には大きな面積が必要であることを強調し、診療スペースを確保していきたい。また、オープンホスピタルなど同窓の先生方と協力した診療体制を構築していきたいとの構想が説明された。

議題について

1. 同窓会総会の日程について

同窓会総会は決算の関係などから、4月の第3土曜日が望ましい。本年度は解剖体祭と重なり日程調整が困難であったことから、今後の見通しについて同窓会側から前田学部長に質問を行った。その結果、解剖体祭は4月の第2土曜日を中心に行われること、解剖体祭は歯学会の日程にそれほど大きな影響を及ぼさないことが説明され、同窓



会総会の日程に関しては歯学会の庶務幹事と相談することで対応することとなった。

2. 学生の国家試験対策について

学生が国家試験勉強をする際に大学として対策を講じてほしい旨要請した。これに対し前田学部長から、業者に講師を依頼すると多額の費用が発生するため、大学としては施設を貸与する、各講座から試験対策の窓口になるような教員を選出するなどの対策を検討している旨説明があった。

3. 同窓会からの学生表彰制度について

同窓会から勉学優秀な学生などを対象にした表彰制度を設置したい旨提案した。これに対し前田学部長から、勉学や人命救助などに関しては学部長表彰の制度があるので、部活動などなかなか表に出ない分野の表彰を検討してほしいと回答があった。

会は終始なごやかな雰囲気の中、時事問題やOBの近況に関することなどにも話がおよび、有意義な時間が流れた。今後も同窓会と大学が良い関係を継続できるよう協力することが確認され、齊藤教授の挨拶で閉会した。

歯学科6年生、口腔生命福祉学科4年生と同窓会との交流会

27期 渉外担当理事 多部田 康 一

11月2日(金)に「歯学科6年生、口腔生命福祉学科4年生と同窓会との交流会」が歯学部大会議室で開催されました。歯学科6年生から42名、口腔生命福祉学科から26名と多数の学生に参加いただきました。口腔生命福祉学科においては、来春初めての卒業生が送り出されるということで、本年度より口腔生命福祉学科4年生にも交流会へ参加していただくことになりその人数からも大変賑やかなものとなりました。同窓会側からは多和田会長、佐藤副会長、宮野副会長、鈴木副会長、成田専務理事を始めとしてその他学内外理事8名の先生方に参加いただきました。

鈴木副会長の司会進行により会は始まり、多和田会長よりのご挨拶においては、以前より厳しくなっている歯科界の現状においては、自分の目標をしっかりと決めてそれに向けて決断を行っていく





と良い、また特に口腔生命福祉学科の学生においては是非この先に続いていく卒業生のためにも積極的に頑張っ欲しいといった趣旨で激励をいただきました。成田専務理事よりの新潟大学歯学部同窓会の事業・活動内容についての説明のあと、宮野副会長より乾杯の御発声をいただき、アルコールとともに会は和んでゆきました。また、会の途中においては野内先生（20期生）より開業医としての日常について、症例等含めての講演をしていただきました。

以前6年生が就職先を探す夏休み前に行われていた交流会ですが、研修医の必修化後、進路相談・アドバイスといったことが具体的に難しいことから、本年は歯学科6年生の臨床実習の終了に会わせて開催されました。趣旨としては本学歯学部同窓生として歯学部同窓会の活動について理解していただき今後同窓会を歯学科、口腔生命福祉学科共に協力してより盛り上げて頂くお願いになったかと思えます。学部卒業後、県外の大学や機関にて研修を受けるか、就職する学生も多くおり、本学で研修を受けるとしてもなかなか同窓会と接する機会も無いことから、将来同窓会の一員として協力いただく学生とこのような機会を設けることにより、同窓会の活動について理解をしていただくことはとても意義のあることと考えられました。

第54回全国歯科大学同窓・校友会懇話会報告

副会長 宮野正美

日時：平成19年10月27日(土) 午後2時
場所：九州大学医学部百年講堂大ホール

第54回全国歯科大学同窓・校友会懇話会（全歯懇）が、平成19年10月27日(土)に九州大学歯学部同窓会の主催により開催されました。多和田会長、佐藤副会長と私の3名で出席しましたので、ご報告致します。

懇話会冒頭の来賓挨拶の中で、先の参議院選挙で初当選された石井みどり参議院議員より選挙応援に対する謝辞と国会活動報告がなされた。全国の歯科医師の代表として今後の活躍が期待される所である。

今回のテーマは「若い歯科医師に今、何を伝えたら良いか」と言うことで、事前アンケートが取られていた。(アンケート結果抜粋)

1. 若い先生に一番伝えたいもの：医療人としての自覚や使命感、歯科医療の重要性・すばらしさ、夢と希望を持って努力すること、同窓会への帰属意識を持つこと、政治力をもつこと等。
2. 若い歯科医師について：よく勉強している8校、やる気が感じられる11校、やる気が感じられない4校、失礼な態度が多い2校
3. 若い先生達の熱意はどうか：非常に前向きで積極的12校、やる気はあるが空回り状態10校、あまり熱心ではない5校
4. 将来について若い先生達はどう思っていると思うか：非常に暗いと悲観1校、非常に暗いが頑張りたい19校、歯科の将来は明るい9校
5. 若い先生の同窓会離れに対する対策は：会費前納、同窓会ゴールドカード発行、進路相談会、学生組織・諸行事への支援、奨学金、卒後3年学術講演会無料、支部・県人会との交流等

シンポジウムでは宮地建夫先生は国民（社会）の健康観と歯科医療提供側の健康観とのギャップ





を指摘し、患者様から学ぶ姿勢の重要性を説かれた。又、北川原建先生は国民の視点にたった医療システム、医療経済の構築の必要性を述べられた。今回のテーマに関してのパネラーの講演は、若い先生や学生の方には有意義なものではあったが、同窓会活動と直接的にはかみ合わないこともあり、会場からの発言が少なく盛り上がりを欠いたことは残念なことであった。

協議では、次々回当番校に九州歯科大学同窓会が選出された。又、鶴見大学歯学部、神奈川歯科大学より会員の選挙応援に対する謝辞が述べられ、奥羽大学歯学部から平成20年度開催の30周年事業予定が紹介された。

懇親会終了後、福岡県代表幹事である波多野達郎先生（18期生）と懇談することができました。新潟の近況や遠方から見た同窓会の感想などいろいろとお話ができ、初対面ではありましたが同窓会としての親近感を実感しました。先生にはこれまでたびたび福岡県内における諸行事に同窓会会長代理としてご出席いただき大変ありがとうございます。この紙面をお借りして厚くお礼申し上げます。

会次第

1. 開会の辞
九州大学歯学部同窓会 副会長 石井 潔
2. 当番校会長挨拶
九州大学歯学部同窓会 会長 高島 昭博
3. 来賓紹介
4. 出席者紹介
5. 来賓挨拶
日本歯科医師会 会長 大久保満男
福岡県歯科医師会 会長 秋山 治夫
参議院議員 石井みどり
福岡市歯科医師会 会長 山本 達郎
九州大学大学院歯学研究院長 赤峰 昭文
6. シンポジウム
「若い歯科医師に今、何を伝えたら良いか」
東京都開業 宮地 建夫

長野県開業 北川原 健
九州大学病院副院長 古谷野 潔

7. 協議
議題(1)次々回当番校選出
(2)その他
8. 次期当番校挨拶
北海道大学同窓会 会長 村井 清彦
9. 閉会の辞
九州大学歯学部同窓会 副会長 中村 典史

平成19年度新設国立大学歯学部 同窓会連絡協議会報告

同窓会副会長 佐藤 定雄

日 時：平成19年10月28日(日)

場 所：博多サンヒルズホテル

当番校：九州大学歯学部同窓会

内 容：

- 1) 講演 「新歯科医師臨床研修制度への対応」
講師
九州大学病院歯科 総合診療科教授
樋口勝則先生

内容

臨床研修制度が発足して2年が過ぎようとしている現在、様々な問題点が顕在化してきた。研修施設側では、基準緩和により不足を補う方向にあるが、協力施設および指導歯科医師数の不足が挙げられる。研修歯科医の技術的指導のほか、さらに心のケアが重要になってきたことは双方共に深刻である。研修歯科医側では、指導歯科医との間に意欲上の差異があるほか、双方が受け取る手当てが不十分であり且つ施設により差があつてこれが不満の源泉となっている。対策としての卒前教育を十分行なうためにその見直しが必要である。

以上種々提案が示されたが、文部科学省と厚生労働省の横の連携と抜本的改善の必要性を痛感させられた。



2) 協議

1. 同窓会における慶弔事項との取り組み（九州大学）；同窓会の福利厚生全般についての取り組みについて（新潟大学）

目新しいものとしては、「高齢者優待会員制度(大阪大学)」、「所得補償制度(九州大学)」、慶弔規約で、「慶事：会員本人の結婚に祝電、弔事：会員本人だけでなく配偶者、会員の1親等にも何らかの対応をしている（大阪大学）」などの報告があったが、その他全般的に新潟大学歯学部は充実していると実感した。同窓会年会費の額に違いがあり、高額な同窓会はそれなりの手厚い対応ができています。

2. 学術オンデマンド配信について(大阪大学)

学術講演をビデオ撮影しこれをインターネットで配信するシステム。質問ができない欠点などが報告された。

3. 口腔保健学科卒業生の歯学部同窓会入会について（広島大学）

口腔保健学科卒業生を歯学部同窓会に加入させない方針とのこと。新潟大学歯学部の加入方針を評価して欲しいと思われた。

3) 次回・次次回当番校について

次回 北海道大学

次次回 九州大学

同窓会セミナー

「進化する歯内療法—明日からの臨床のための体験コース—」に参加して

16期 岡部孝一

「あまりにも根管治療に労力を費やしてはいないか」

本セミナーに参加した理由はこれにつきます。彎曲根管に、あまりに時間がかかりすぎてはい

ないか。十分ファイリングしたつもりなのにポイントがアピカルシートまで到達しない時など、根気が途切れてしまいそうになるのは私だけなのだろうか。何とかして精度を落とさずに（できれば精度を上げて）かつ根管治療を省力化できないものだろうか。

さらに、根管洗浄は根尖まで届いているのだろうか、何号まで拡大すればいいのだろうか、根管孔部の三角部をどう削除していくのか、側方加圧で根尖部まで緊密に充填されているのだろうか、などなど、今まで抱き続けてきた疑問の多くは今回のセミナーで氷解し、いくつかはその糸口が見つかりました。

今回実習いたしましたNi-Tiファイルに関しては、すでに導入されておられる先生も多いと思いますが、今回初めて試用してみて自分の日常臨床のシステムが大きく変化するかもしれないという予感を強く感じました。未体験の先生は、一度手にとってみられてもよろしいのではないのでしょうか。

言うまでもございませんが、問題点は、ファイルの破折をどう防いでいくか、不幸にして破折した場合どう対処するか、後はランニングコストの問題ではないかと愚考いたします。拙速ながら購入しましたので、臨床に応用すべく、まずは抜去歯で手になじむまで修練するつもりです。

本セミナーは密度、充実度を鑑みますと、再び開催されますならば是非のご参加をお勧めいたします。蛇足ながら、今回の二万円という参加費は、実習付き、材料費・昼食費込で、本当に恐縮するぐらい格安でした。私事ですが、十数年ぶりに実習室に入り、学生時代を懐かしく思い出しました。

本当に有意義で、我が意を得たりのセミナーでした。末筆ながら興地先生、教室の諸先生、関係の各先生方に心より御礼申し上げます。



同窓会セミナーの様子





2年目を迎えた全学同窓会

歯学部同窓会会長 多和田 孝 雄
全学同窓会副会長

平成15年10月6日(月)、新潟大学本部特別会議室において将来の全学同窓会の設立を目指して新潟大学全学同窓会連絡協議会の結成準備会が開催された。

深澤助雄副学長を大学からのオブザーバーとして迎え、全ての学部同窓会の代表者が出席して、歴史的な第一歩となる会議が開催されたのである。私は当時まだ副会長であったが神田会長の代理として出席した。しかし、会を重ねるにつれ各学部同窓会間の利害の乖離が露見し、中でも全学同窓会の会費問題は本会の設立を流産しかねないほど深刻であった。年が明け大学の法人化が大学にとって如何に重要な事案であるかということに各学部同窓会は目覚め、当年4月1日の新潟大学法人化と同日に全学同窓会連絡協議会は発足した。以降は各学部同窓会屈指の人材の参加を得て全学同窓会は他大学では考えられないほどのスピードで組織や制度を整備し、困難な事業にも果敢に取り組んでいく強力な組織に成長した。ただここまでの充実の陰には長谷川彰学長を始めとした大学執行部役員の本気で積極的なサポートがあったことを永く忘れてはならない。

平成18年4月1日、いよいよ全学同窓会は誕生し、同年には沖縄県支部、佐渡支部も設立された。また、新潟大学カードもこの頃から検討され、翌平成19年の初めに勧誘が開始された。本カードの

導入において歯学部同窓会の佐藤定雄副会長、福島正義理事が中心的役割を果たしたことを歯学部同窓会は誇りに思う。本年9月末現在、会員の家族を含めた全体での加入者総数1,919名中歯学部同窓会からは151名が加入している。私は1,000名に達するまで勧誘の手を緩めないつもりである。また、同時に会員を対象に募金を開始した賛助会費は9月末現在で、全1,343.5口中歯学部同窓会は75口であった。残念ながら物足りない数字である。平成19年7月16日に新潟県中越沖地震が発生した。大学の機敏な対応は十分に予見できたので、歯学部同窓会は同じ週の土曜日(7月21日)開催の全学同窓会理事会で、新潟大学が行う災害復興支援事業を支援する目的で各学部同窓会から支援金を拠出することを提案し、賛同をいただいた。支援金授受の様子は本年10月1日発行の全学同窓会広報誌「雪華」に掲載されている。11月3日(土)にはホテル新潟において講師に新潟大学脳研究所の中田力教授を迎えて第3回となる全学同窓会の講演会が開催された。市民の参加も多く、400名の受講者が真剣に聞き入った。また、その価値のある講演会であった。

2009年新潟大学は60周年を迎えるが、全学同窓会は大学側の記念事業への協力、門もしくは電光掲示板、植樹等の形あるものの寄贈を検討している。



歯学祭を終えて

実行委員長 歯学科3年 眞 舘 幸 平

今年の歯学祭は、両日晴天、客入り上々といった具合で例年に負けず劣らずの盛り上がりでした。私にとって、「実行委員長」のような大役を任されるのは初めてだったので、当然ながら最初は不安もありました。しかし、副実行委員長をはじめ、各チーフ、そして3年生みんなが下級生をまとめ、各々が責任をもって準備を進めてくれたおかげで、大変ながらもこの大役を完遂することができたのだと思います。実は直前に小さなハプニングがあったのですが、それもチーフとの連携で当日までにはなんとか挽回し、準備を整えることができました。こういった、生徒みんなのがんばりのおかげで、みなさんが心から楽しんでいただける歯学祭を開催することができたのではないかと自負しています。

今年は、お笑い芸人のFUJIWARAとトータルテンボスによるイベントも企画したのですが、これは歯学祭では初めての試みと聞いていたので、成功するかどうかと直前まで心配していました。しかし、一番手のトータルテンボスが会場に現

れたときの歓声……すぐに私の不安は吹き飛んだのを覚えています。今年の歯学祭のテーマにふさわしい笑顔が会場にあふれ、続くFUJIWARAのライブも盛り上がり、まさに今年のテーマの「完全燃笑」を体現したといえる結果になったのではないのでしょうか。

ところで、学生の皆さんは各診療科が行っている病院展示を見に行ったことはありますか？ 下級生の皆さんはまだ早いと思って見に行っていない人もいるかもしれませんが、これからの自分の将来をよく考える機会にもなりますし、きっとモチベーションもあがると思うので、来年はぜひ行ってみたいはどうでしょうか。

最後にはなりましたが、この場を借りて副実行委員長、チーフをはじめとした各係りの皆さん、協力して下さった先生方、寄付していただいた皆様方にお礼を申し上げます。大変だとは思いますが、来年の歯学祭実行委員の皆さんもがんばってください。そして、来年もまたたくさんの方の来場をお待ちしています。



教 職 員 異 動

学 部

【教員等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
配置換	20. 1. 1	廣 富 敏 伸	予防歯科学分野・助教	医歯学総合病院地域保健医療推進部・助教
採用	20. 1. 1	島 田 靖 子	歯周診断・再建学分野・助教	医歯学総合病院・医員
採用	20. 1. 1	渡 邊 直 子	歯科矯正学分野・助教	医歯学総合病院・特任助教
採用	20. 1. 1	弦 巻 立	歯科侵襲管理学分野・助教	医歯学総合病院・医員
退職	20. 3. 31	子 田 晃 一		う蝕学分野・准教授
退職	20. 3. 31	毛 利 環		歯科矯正学分野・助教
退職	20. 3. 31	江 尻 貞 一		硬組織学分野・准教授

【事務部等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
定年退職	20. 3. 31	内 山 良 明		学務課・副課長
定年退職	20. 3. 31	中 野 周 二		生体材料学分野・技術専門員
定年退職	20. 3. 31	高 橋 義 弘		生理学分野・技術専門職員

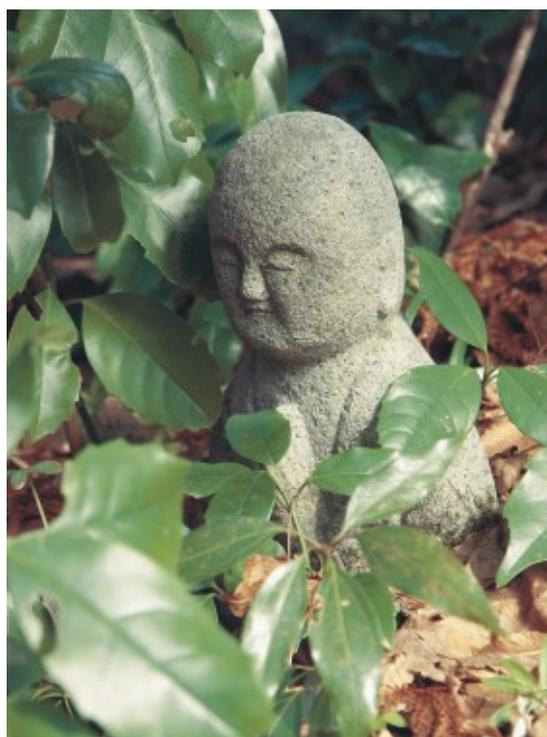
病 院

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
退職	19. 9. 30	土 田 しのぶ		義歯(冠・ブリッジ)診療室・医員
退職	19. 9. 30	色 川 裕 士		義歯(入れ歯)診療室・医員
退職	19. 9. 30	金 城 篤 史		義歯(冠・ブリッジ)診療室・医員
退職	19. 9. 30	川 岸 恵理子		歯の診療室・医員
採用	19. 10. 1	若 松 里 佳	歯の診療室・医員	
採用	19. 10. 1	昆 はるか	義歯(入れ歯)診療室・医員	
採用	19. 10. 1	中 館 正 芳	義歯(冠・ブリッジ)診療室・医員	
退職	19. 11. 21	西 川 幸 枝		インプラント治療部・歯科衛生士
退職	19. 11. 30	青 柳 貴 之		インプラント治療部・医員
所属換	19. 12. 1	山 田 裕 士	インプラント治療部・医員	顎顔面外科診療室・医員
採用	19. 12. 1	嵐 山 貴 徳	顎顔面外科診療室・医員	
退職	19. 12. 31	竹 山 雅 規		歯科麻酔科診療室・医員
退職	19. 12. 31	弦 巻 立		歯周病診療室・医員
退職	19. 12. 31	島 田 靖 子		噛み合わせ診療科・医員

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
退職	19. 12. 31	渡 邊 直 子		歯周病診療室・特任助教
採用	20. 1. 1	天 沼 亮 子	歯周病診療室・医員	
採用	20. 1. 1	加 藤 祐 介	口腔再建外科診療室・医員	
採用	20. 1. 1	原 田 史 子	矯正歯科診療室・医員	
配置換	20. 1. 1	廣 富 敏 伸	医歯学系へ	地域医療保健推進部・助教
採用	20. 1. 1	竹 山 雅 規	矯正歯科診療室・特任助教	
採用	20. 2. 1	石 澤 尚 子	歯科衛生部門・歯科衛生士	
退職	20. 2. 29	子 田 浩		義歯(入れ歯)診療室・医員
採用	20. 3. 1	金 城 篤 史	義歯(入れ歯)診療室・医員	
退職	20. 3. 21	前 川 孝 治		顎顔面外科診療室・医員
退職	20. 3. 31	小 玉 直 樹		口腔再建外科診療室・医員
退職	20. 3. 31	中 里 隆 之		口腔再建外科診療室・医員
退職	20. 3. 31	五 島 秀 樹		口腔再建外科診療室・医員
退職	20. 3. 31	相 川 弦		口腔再建外科診療室・医員
退職	20. 3. 31	加 藤 祐 介		歯の診療室・医員
退職	20. 3. 31	若 松 里 佳		歯周病診療室・医員
退職	20. 3. 31	天 沼 亮 子		矯正歯科診療室・医員
退職	20. 3. 31	原 田 史 子		歯科総合診療部・医員
退職	20. 3. 31	庭 野 友理子		歯科総合診療部・医員
退職	20. 3. 31	仲 川 なぎさ		摂食・嚥下機能回復部・医員
退職	20. 3. 31	富 樫 元 子		歯科技工部門・医員
退職	20. 3. 31	木 村 睦 美		義歯(冠・ブリッジ)診療室・歯科技工士
退職	20. 3. 31	白 倉 正 基		義歯(冠・ブリッジ)診療室・助教
退職	20. 3. 31	竹 石 英 之		口腔再建外科診療室・助教
退職	20. 3. 31	佐 藤 秀 樹		歯の診療室・レジデント
退職	20. 3. 31	本 間 春 菜		小児歯科診療室・レジデント
退職	20. 3. 31	津 田 高		歯周病診療室・レジデント
退職	20. 3. 31	西 村 雄 介		義歯(入れ歯)診療室・レジデント
退職	20. 3. 31	真 柄 仁		顎顔面外科診療室・レジデント
採用	20. 4. 1	齋 藤 正 直	顎顔面外科診療室・医員	継続・医員
採用	20. 4. 1	庭 野 将 広	顎顔面外科診療室・医員	継続・医員
採用	20. 4. 1	小 林 孝 憲	顎顔面外科診療室・医員	継続・医員
採用	20. 4. 1	小 山 貴 寛	顎顔面外科診療室・医員	継続・医員
採用	20. 4. 1	嵐 山 貴 徳	顎顔面外科診療室・医員	継続・医員
採用	20. 4. 1	新 國 農	画像診断・診療室・医員	継続・医員
採用	20. 4. 1	新 美 奏 恵	口腔再建外科診療室・医員	継続・医員
採用	20. 4. 1	中 西 義 崇	口腔再建外科診療室・医員	継続・医員
採用	20. 4. 1	加 藤 健 介	口腔再建外科診療室・医員	再採用・医員
採用	20. 4. 1	船 山 昭 典	口腔再建外科診療室・医員	
採用	20. 4. 1	小 島 拓	口腔再建外科診療室・医員	

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	20. 4. 1	倉田 行伸	歯科麻酔科診療室・医員	継続・医員
採用	20. 4. 1	金丸 祥平	歯科麻酔科診療室・医員	
採用	20. 4. 1	船山 さおり	加齢歯科診療室・医員	継続・医員
採用	20. 4. 1	谷口 裕重	加齢歯科診療室・医員	
採用	20. 4. 1	高野 尚子	予防歯科診療室・医員	継続・医員
採用	20. 4. 1	松本 紗耶香	予防歯科診療室・医員	
採用	20. 4. 1	中舘 正芳	義歯(冠・ブリッジ)診療室・医員	継続・医員
採用	20. 4. 1	下条 智子	義歯(冠・ブリッジ)診療室・医員	継続・医員
採用	20. 4. 1	坂井 幸子	小児歯科診療室・医員	継続・医員
採用	20. 4. 1	飯澤 二葉子	小児歯科診療室・医員	継続・医員
採用	20. 4. 1	沼 奈津子	小児歯科診療室・医員	継続・医員
採用	20. 4. 1	重谷 佳見	歯の診療室・医員	継続・医員
採用	20. 4. 1	斎藤 健	歯の診療室・医員	継続・医員
採用	20. 4. 1	鞍立 桃子	歯の診療室・医員	
採用	20. 4. 1	山田 一穂	義歯(入れ歯)診療室・医員	継続・医員
採用	20. 4. 1	昆 はるか	義歯(入れ歯)診療室・医員	継続・医員
採用	20. 4. 1	金城 篤史	義歯(入れ歯)診療室・医員	継続・医員
採用	20. 4. 1	越知 佳奈子	矯正歯科診療室・医員	継続・医員
採用	20. 4. 1	小栗 由充	矯正歯科診療室・医員	継続・医員
採用	20. 4. 1	中川 麻里	矯正歯科診療室・医員	継続・医員
採用	20. 4. 1	小松 康高	歯周病診療室・医員	継続・医員
採用	20. 4. 1	本田 朋之	歯周病診療室・医員	継続・医員
採用	20. 4. 1	中曽根 直弘	歯周病診療室・医員	継続・医員
採用	20. 4. 1	平山 実里	歯科総合診療部・医員	継続・医員
採用	20. 4. 1	田島 卓	顎関節治療部・医員	継続・医員
採用	20. 4. 1	那須 真樹子	顎関節治療部・医員	継続・医員
採用	20. 4. 1	山田 裕士	インプラント治療部・医員	継続・医員
採用	20. 4. 1	吉田 恵子	インプラント治療部・医員	継続・医員
採用	20. 4. 1	市川 加奈	歯科衛生部門・医療技術補助員	
採用	20. 4. 1	大岩 典代	歯科衛生部門・医療技術補助員	
育休復帰	20. 4. 1	小竹 洋子	歯科外来・看護師	
育休復帰	20. 4. 1	蝶名林 文子	歯科外来・看護師	
配置換	20. 4. 1	阿部 由起子	救急・集中治療部へ	東3病棟・看護師
配置換	20. 4. 1	阿部 渚	西10病棟へ	東3病棟・看護師
配置換	20. 4. 1	品田 真理子	西4病棟へ	東3病棟・看護師
昇任	20. 4. 1	福田 千恵子	東3病棟・看護師長	
採用	20. 4. 1	後藤 早苗	契約職員から常勤へ	歯科衛生部門・歯科衛生士
採用	20. 4. 1	石澤 尚子	パートから常勤・歯科衛生士	歯科衛生部門・歯科衛生士
配置換	20. 4. 1	小林 富佐子	歯科外来へ	東3病棟・准看護師
採用	20. 4. 1	堀井 信哉	顎顔面外科診療室・レジデント	継続・レジデント

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	20. 4. 1	松川 理美	顎顔面外科診療室・レジデント	継続・レジデント
採用	20. 4. 1	大貫 尚志	顎顔面外科診療室・レジデント	継続・レジデント
採用	20. 4. 1	塚田 博子	歯科麻酔科診療室・レジデント	継続・レジデント
採用	20. 4. 1	中尾 敦子	加齢歯科診療室・レジデント	継続・レジデント
採用	20. 4. 1	崎谷 仁重	義歯(冠・ブリッジ)診療室・レジデント	継続・レジデント
採用	20. 4. 1	細川 由佳	小児歯科診療室・レジデント	継続・レジデント
採用	20. 4. 1	深井 仁美	歯の診療室・レジデント	継続・レジデント
採用	20. 4. 1	二瓶 垂津子	義歯(入れ歯)診療室・レジデント	継続・レジデント
採用	20. 4. 1	長谷川 麻衣子	歯周病診療室・レジデント	継続・レジデント
採用	20. 4. 1	高山 由紀子	歯科総合診療部・レジデント	継続・レジデント
採用	20. 4. 1	橋田 窓花	歯科総合診療部・レジデント	継続・レジデント
採用	20. 4. 1	高橋 繭子	歯科総合診療部・レジデント	継続・レジデント
採用	20. 4. 1	安達 大雅	摂食・嚥下機能回復部・レジデント	継続・レジデント
採用	20. 4. 1	坂本 彩子	東3病棟・看護助手	
採用	20. 4. 1	鈴木 歌織	東3病棟・看護助手	
採用	20. 4. 1	藤田 有香	東3病棟・看護助手	



編集後記

初めて歯学部ニュースの編集を担当させていただきました。私が担当したのは、「特集・学生の活躍」、「早期体験実習を終えて」、「臨床研修修了にあたって」などで、学生さんや若いドクターへの原稿依頼や回収が中心でした。特に「学生の活躍」では、近年活躍が目覚ましいとされる体育会系の各部にスポットを当ててご紹介をさせていただいています。大変面白く興味深い内容となっていますので、今後もこのような特集で学生たちの生き生きとした表情を伝えることができることを期待しています。

今回、突然の原稿依頼にも関わらず執筆いただきました皆様には改めて御礼申し上げます。また、お忙しい中、快く原稿依頼を引き受けてくださり、卒業生への心からの祝福の言葉をいただきました前田学部長にも深謝いたします。慣れない編集委員の仕事を後方から支えてくださった広報委員会の大島勇人教授、今号の編集長として取りまとめをされました西山秀昌先生以下各編集委員の方々には本当に御世話になりました。

摂食・嚥下リハビリテーション学 井上 誠

仕事柄、日頃実験室にこもることが多く、卒業して14年、母校でありながら研究棟5階から出あらくことがありませんでした。今回、他科の先生や学生さん、同窓会のOBの先生にまで原稿をお願い、歯学部内をあっちこっち歩き回りました。すると、学生の時には知らなかった診療科や建物、その他いろんなものが目に入り、浦島太郎になったような不思議な気分を味わうとともに、“自分は、こうゆう大学で仕事をしていたんだ”と親しみと愛着を新たにしました。でも、浦島太郎は竜宮城で鯛やヒラメの舞い踊り、私は実験室でマウスやラットの……、うーん。

口腔解剖学 河野 芳朗

編集委員の皆さん、ご苦労様でした。特に編集責任者の西山先生、まとめ役ありがとうございました。また、お忙しい中、半ば強引に押しつけられながらも快く原稿依頼をお引き受けいただいた先生方や学生さんには感謝のきもちでいっぱいです。人のやさしさが身にしみました。

顎顔面口腔外科学 福田 純一

原稿をお願いに伺いました皆様は、大変お忙しい方ばかりでしたが、快く執筆をお引き受けくださいました。ありがとうございました。この場をお借りしてお礼申し上げます。私も歯学部ニュースの愛読者の一人です。これからも、楽しく充実した歯学部ニュースが続いていくことを願っております。

小児歯科学 松山 順子

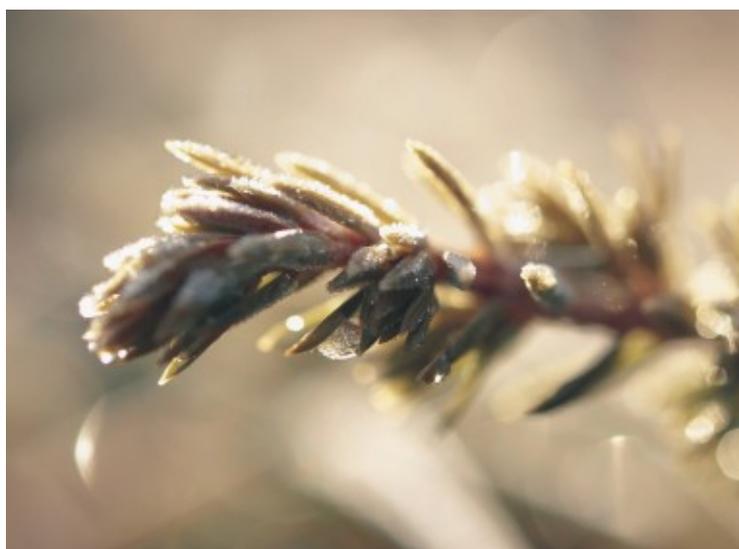
今回、編集委員長という大役を仰せつかったものの、編集後記(へんしゅうこうき)を「へんしゅうこうき」と読むものと思っていたほどで、どうなることやらと思って自ら危惧していたら、予感的中してしまいました。大島先生から、「1号2号の連携が重要」と指摘を受けていたにもかかわらず、新連載を2本もストップさせてしまいました。皆様には、この場を借りてお詫び申し上げます。大島先生に恐る恐るお聞きしたところ、「連載モノを毎号にするか隔号にするかは、編集委員会にて決めていただければいい」との暖かい言葉を頂戴し、次期編集委員会宛の仕事もきっちり(?)残すことができました。(申し訳ございませんでした。)

以下、次期2号編集委員長への伝言です。1号が編集作業中に飛び交うメールには、タイトルと

前半の内容から判断して全く関係がなさそうなメールであっても、隅から隅まで目を通してください。特にメールのスクロールを怠らないようにしてください。スクロールすると、非常に重要な「キーワード」が隠されていることがあります。

最後に、本誌を無事発行することができたのも、編集委員の皆様、快く投稿してくださいました皆様、ご指導いただきました大島先生・小野先生、表紙を含め多くの写真を提供くださいました林先生、名簿関係の資料の問い合わせ先を教えてください、快く提出して下さった事務の皆様、その他、多くの皆様の御陰があつてのことだと、深く感謝しております。ほんとうに貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。

顎顔面放射線学 西山 秀昌



歯学部ニュース

平成19年度第2号（通算112号）

発行者 新潟大学歯学部広報委員会

編集責任者 西山 秀 昌

編集委員 井上 誠、河野 芳朗、
福田 純一、松山 順子

印刷所 (株)プライムステーション

表紙・裏表紙の写真の説明

表紙

撮 影 地：西生寺（長岡市寺泊野積）

撮 影 日：2008年3月

撮影データ：オリンパス E-410/ズイコーデジタル ED12-60mm F2.8-4.0SWD（焦点距離：60mm）/絞り優先オート（F4.0・1/250秒）/記録画素数：3648×2736・JPEG/ISO：200/ホワイトバランス：晴天

裏表紙

撮 影 地：妻戸神社（長岡市寺泊野積）

撮 影 日：2008年3月

撮影データ：オリンパス E-410/ズイコーデジタル ED12-60mm F2.8-4.0SWD（焦点距離：19mm）/絞り優先オート（F4.0・1/320秒）/露出補正+0.7EV/記録画素数：3648×2736・JPEG/ISO：200/ホワイトバランス：晴天

コ メ ント：ただ人の形をしているだけの木や石に、人はなぜ心を動かされるのでしょうか。限られた自分の一生よりもずっと未来まで存在し続けるであろう永遠性に対する憧憬でしょうか。しかしそれこそ、永遠への執着、煩惱なのかもしれません。また同時に、そういう思いこそ、人間らしいともいえます。人が生きていくためには、物語が必要であることの証左なのではないでしょうか。

本誌中の写真の使用機材

ボ デ ィ：オリンパス E-410、E-500、SP-550UZ

レ ン ズ：ズイコーデジタル ED12-60mm F2.8-4.0SWD、ズイコーデジタル ED 50mm F2.0マクロ、ズイコーデジタル11-22mm F2.8-3.5、ズイコーデジタル14-54mm F2.8-3.5、オリンパス ED レンズ4.7-84.2mm F2.8-4.5

撮 影 者：林 孝文

